

歴史考古学からみた倭国王帥升の台頭

岡村 秀典

1 東夷王の朝貢

紀元前108年、漢武帝は衛氏朝鮮国を滅ぼし、楽浪・玄菟・臨屯・真番の4郡を設置した。武帝を継いだ昭帝は、前82年に楽浪郡の東南と南に位置する臨屯・真番郡を廃止、前75年には東北に位置する玄菟郡を遼東に移し、旧4郡域のほとんどは楽浪郡に併合された。これによって楽浪郡は漢の東方支配の最前線に位置することになった。郡治址はいま北朝鮮ピョンヤン市に所在する。「楽浪海中に倭人あり。分かれて百余国となる。歳時をもって来たり献見すと云う」という『漢書』地理志下の記事は、楽浪郡の再編以後の状況をあらわしている。

日本列島に大量の漢鏡が流入するのは、漢鏡3期後半（前1世紀中葉）のことである〔岡村1999：8-51頁〕。福岡県三雲南小路1号・2号甕棺墓と須玖岡本D地点甕棺墓にそれぞれ30面ほどの漢鏡が副葬されている。ちょうど楽浪郡の再編から間もないころにあたる。当該期の漢鏡の出土数をみると、韓国では東南部を中心に十数面、日本では北部九州を中心に計100面あまり出土し、楽浪郡から遠く離れた北部九州への偏りがいちじるしい。しかも、鏡の大きさをみると、韓国出土鏡は径10cmほどの小型鏡がほとんどなのに、北部九州には径16cm前後の中型鏡が多く、漢鏡2期（前2世紀後半）にさかのぼる径20cm以上の大型鏡も数面ふくまれている。漢鏡の出土数と面径にあらわれた格差からみれば、経済的な交易によって流通したというよりも、漢王朝は海をこえた倭人を政治的に厚遇したと考えられる。

楽浪郡の再編された翌年に昭帝が崩じ、後嗣をめぐる混乱ののち民間に成長した宣帝が迎立された。宣帝の親政がはじまった前65年ごろから甘露や鳳凰などの瑞祥がたびたび出現し、九真郡（ベトナム北部）からは白象、南郡（湖北省西部）からは白虎が献上された。これにより宣帝は年号を神爵・五鳳・甘露・黄龍へと次つぎに改元し、官吏や一般庶民への賞賜が頻繁におこなわれた。祥瑞の出現は天が皇帝の治世を賞賛していることのしるしとされたからである〔西嶋1974：294-295頁〕。また、前60年には匈奴の日逐王が漢に帰順し、匈奴の分裂によって前51年には呼韓邪単于みずから臣を称して漢に帰属した。これに対して宣帝は璽綬・冠帯衣裳・安車駟馬・黄金・絹織物などを贈っている。このような国内外の情勢からみると、その治世を嘉して海のかなたより倭人が「歳時をもって来たり献見」していることを宣揚するため、宣帝は見返りとして漢鏡などを手厚く賞賜した可能性が高い〔岡村1999：8-51頁〕。

下って前1年、哀帝が崩じ、わずか9歳の平帝が即位する。太皇太后（王政君）が臨朝称制し、王莽が輔政した。王莽は幼い周成王を補佐した周公にみずからをなぞらえ、蛮夷からの朝貢を演出する。すなわち、元始五年（後5）、王莽の上奏文に「太后統を乗ること数年、恩沢洋溢し、和気四

塞す。絶域の殊俗、義を慕はざるなし。越裳氏重訳して白雉を献じ、黄支三万里より生犀を貢じ、東夷王大海を渡りて国珍を奉じ、匈奴单于制作に順い二名を去る」(『漢書』王莽伝上)という。蛮夷のなかでも絶域にある越裳氏・黄支・東夷王と匈奴单于が元后の恩義を慕って帰服したというのである。同伝の元始四年条にも王莽は、北に匈奴、東に海外の民、南に黄支を懐柔したが、西からの入朝はなかったため、中郎将平憲らに多くの金幣をもって塞外の羌族を誘致させた⁽¹⁾とあり、その羌族から献上された土地に西海郡を設置している。

越裳氏の朝貢については、『漢書』平帝紀に元始元年(西暦1)「春正月、越裳氏 訳を重ねて白雉一・黒雉二を献ず。詔して三公をして以て宗廟に薦めしむ。羣臣 大司馬莽の功德の周公に比するを奏言し、安漢公を賜号す」とある。もっとも、同王莽伝上はそれを「始め、益州に風して塞外の蛮夷に白雉を献じせしめ、元始元年正月、莽は太后に白して詔を下し、白雉を以て宗廟に薦めしむ」と記している。すなわち、平帝即位の年に王莽は益州の役人に命じて塞外の蛮夷から白雉を献上させておき、翌年正月の宗廟のまつりに供献したという。それは王莽の自作自演であったのである。ちなみに『後漢書』南蛮伝には「交阯の南に越裳国有り。周公の居摂六年、礼を制し楽を作り、天下和平なり。越裳は三ひきの象を以て訳を重ねて白雉を献じて曰く、道路は悠遠、山川は岨深にして、音使通ぜず。故に訳を重ねて朝す、と。……周公乃ち之を(成)王におくり、先王の神致と称し、以て宗廟に薦む」とあり、李賢注にこの故事は『尚書大伝』にみえるという。交阯は武帝がベトナム北部に設置した郡であり、越裳国はその南に位置する。この周公伝説は前漢末期に成立した可能性が高いと東晋次〔2003: 106-109頁〕はいう。

翌年、越裳国よりもさらに遠い黄支国から犀牛が献上される。『漢書』平帝紀には「(元始)二年春、黄支国 犀牛を献ず」という。もっとも、同地理志下にはその経緯を次のように説く。日南郡(ベトナム中部)のはるか南に黄支国があり、「平帝の元始中、王莽輔政し、威徳を耀かしめんと欲し、厚く黄支王に遣り、遣使をして生きながらに犀牛を献じせしむ。黄支より船行すること八月ばかりにして皮宗に到り、船行すること二月ばかりにして日南の象林の界に到ると云う。黄支の南に已程不国有り、漢の訳使は此より還るなり」という。黄支から日南郡南端の象林県(ホイアン)までは皮宗(マレーシア南部?)をへて船で10か月もかかり、王莽は威徳をかがやかせようと、黄支王に前もって使者を派遣して贈りものを手厚くし、犀牛を生きのまま献上させたというのである。黄支をインド東部に比定する説はさておいても、越裳国よりもさらに遠隔地からの朝貢を演出することによって、王莽は周公を越えようと企んだのだろう。

王莽の上奏文において黄支の次にあげられたのが「東夷王」の朝貢である。「東夷王」は古代を通じて例がなく、「国珍」という漠然とした貢ぎ物をあげるだけで、国の実在も疑わしい。むしろ、かねてより東夷の来貢として知られていたのは「肅慎の楛矢・石弩」である。『国語』魯語下に孔子のことばとして「むかし武王 商に克ち、道を九夷百蛮に通じ、各おのをして其の方賄を以て来貢せしめ、職業を忘ること無からしむ。是に於いて肅慎氏 楛矢・石弩を貢ず。其の長さ尺有咫。先王 其の令徳の遠きを致せるを明らかにせんと欲し、以て後人に示して、永く監ぜしむ」という(『史記』孔子世家に同じ)。「楛」は木、「弩」は鏃(『史記集解』に引く韋昭説、『漢書』五行志の顔注に引く應劭説など)、石鏃を装着した木矢である。石器を用いる原始的な肅慎ですら、周武王の徳を慕って来朝したというのである。また、『晋書』肅慎氏には「周武王の時、楛矢・石弩を献ず。周公の成王を輔くるに逮び、復た使いを遣わし入賀す。爾後千余年、秦漢の盛と雖も、之を致すこと莫きなり。文帝(司

馬昭) 相となるに及び、魏の景元末に来たりて楛矢・石弩・弓甲・貂皮の属を貢ず」とある。肅慎氏は周武王につづいて周公輔政のときにも来貢したというから、王莽は越裳氏の朝貢と並んで肅慎氏の来朝を誇示できたはずである。ところが、王莽はその肅慎氏ではなく「東夷王」の朝貢をとくに演出したのは、「楽浪海中に倭人あり。……歳時を以て来たり献見すと云う」(『漢書』地理志下) という倭人との交流をふまえ、黄支と並ぶ遠夷来貢の意義をいっそう強調しようとしたからであろう(岡村 2021)。それは宣帝のときに来献した北部九州ではなく、さらに遠方であった可能性が高い。

それでは、王莽と倭人との交流は実際どのようなようであったのか、それを次に考古学から検討することにしよう。

2 日本出土の王莽鏡

日本列島から出土する王莽期の文物のなかで、もっとも注目されてきたのが王莽銭である。鑄造時期の限定できる王莽銭は、出土数が多く、遺跡の暦年代を考える手がかりになるからである。寺澤薫の集成によれば、弥生・古墳時代の遺跡から出土した中国銭は 57 遺跡 258 枚あり、その内訳は貨泉 40 遺跡 102 枚以上、五銖銭 15 遺跡 126 枚以上、半両銭 7 遺跡 26 枚、大泉五十と貨布はそれぞれ 2 遺跡 2 枚という。そのうち山口県宇部市沖ノ山遺跡の朝鮮系無紋土器内には半両銭 20 枚と五銖銭 96 枚以上が埋蔵されており、その突出した例を除外すれば、王莽銭の数は中国銭の 8 割近くを占め、とりわけ貨泉の数が多きことに注意される(寺澤 2014: 248-260 頁)。しかも、岡山市高塚遺跡から一括出土した 25 枚を筆頭に、貨泉は九州から中四国・近畿・中部・関東地方まで広域に分布している。出土遺構の不確かな例があり、すべてが新莽期の流入とはいえないとしても、白雲翔〔2020〕の分類では官制の“標準型”貨泉が多く、その出土数が五銖銭よりも多いことは、新莽期の経済交易が前後の時期に比べて非常に活発であったことをものごとがたる。ちなみに、玄界灘に浮かぶ壱岐島の原の辻遺跡は「南北に市糶する」(『魏志』倭人伝) という一支国の拠点集落に比定されるが、ここから出土した中国銭 16 枚のうち、前漢五銖銭と大泉五十は各 1 枚で、のこる 14 枚はすべて貨泉であった(川道・寺澤編 2016)。これも九州・本州と傾向を同じくしている。

漢鏡の流入状況もこの時期に大きく変容する。ひとつは、北部九州を中心とする従前からの漢鏡分布圏とは別に、近畿を中心とする漢鏡分布圏が新たに形成されること、もうひとつは、後者の分布圏には「尚方御」鏡や「王氏昭」鏡など特別な王莽鏡がふくまれていることである。結論からいえば、そこには「東夷王」の遠夷来貢を演出した王莽の政治戦略がかいまみえる。改めてそれを詳しく検討しよう(岡村 2024a、以下「前稿」という)。

漢鏡 4 期後半(1 世紀第 1 四半期≒王莽期)には方格規矩四神鏡 III・IV 式と四葉座 I 式内行花紋鏡があり、日本列島から計 90 面ほど出土している。3 期後半鏡が大量に出土した福岡県三雲南小路の南 100m ほどの井原鑛溝では、18 世紀末に甕棺から 18 面以上の方格規矩四神鏡がまとまって出土した。青柳種信の記録をみると、その内訳は 4 期前半の II 式が 1 面、「漢(新)有善銅」「上大山見神人」「黍言之紀」などの銘文をもつ 4 期後半の III 式が 17 面あり、王莽期にまとめてもたらされた可能性が高い(岡村 1999: 55-57 頁)。しかし、すべて径 17cm に満たない中型鏡で、3 期後半のような大型鏡をふくまないこと、いずれも淮南の民間工房で制作されたとみられることから、交易によっ

て流通し、楽浪郡の市場にて入手されたと考えられる。また、同じヤリミゾ地区では1号・7号・15号・17号木棺墓から4期後半の内行花紋鏡が1面ずつ出土している。いずれも径17cmに満たない中型鏡である〔平尾和久編2013〕。

一方、前稿にみたように、中四国以東には4期前半鏡が点在していたが、4期後半には中四国での分布が希薄になり、北部九州を中心とする従前からの分布圏とは別に、近畿を中心とする分布圏が形成される。しかも、北部九州出土の4期後半鏡はすべて径19cm未満であるのに、備前以東から出土した次の9例はいずれも径22cmをこえる優品である。

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| ①岡山県瀬戸内市花光寺山古墳 | 内行花紋鏡 (24.5cm) |
| ②大阪府茨木市紫金山古墳 | 「尚方御」方格規矩四神鏡 (23.8cm) |
| ③伝奈良県桜井市ホケノ山古墳 | 内行花紋鏡 (23.2cm) |
| ④京都府木津川市椿井大塚山古墳 | 内行花紋鏡 (27.8cm) |
| ⑤京都府八幡市東車塚古墳 | 内行花紋鏡 (22.3cm) |
| ⑥伝三重県明和町齋宮付近出土 | 「尚方作」方格規矩四神鏡 (22.4cm) |
| ⑦岐阜県岐阜市瑞龍寺山山頂墓 | 内行花紋鏡 (22.1cm) |
| ⑧岐阜県美濃市観音寺山古墳 | 「王氏昭」方格規矩四神鏡 (22.6cm) |
| ⑨静岡県磐田市松林山古墳 | 内行花紋鏡 (22.7cm) |

このほか奈良県桜井茶白山古墳から出土した内行花紋鏡片も径20cmをこえる可能性がある。それをふくめて弥生後期前半(後1世紀)の方形墳丘墓から出土した⑦鏡〔赤塚1992〕と出土遺跡不明の⑥鏡以外は、すべて古墳時代前期の前方後円(方)墳から出土したものである。

大阪府紫金山古墳出土の②鏡は、径23.8cm、現状の重さ1011.3g、背面紋様がかなり摩滅している(図1上)。それについて「漢中期」からの伝世による手ずれとみる小林行雄〔1955〕説と铸造不良や踏み返しによる後漢鏡とみる説とが対立し、紋様面の観察にもとづく先史学的な論争がつづいてきた。また、辻田淳一郎〔2019:142-148頁〕は後漢「王朝の膝下で宝鏡として保管されていた」鏡が3世紀の魏晋王朝からもたらされたものと推測する。『魏志』倭人伝にいう「銅鏡百枚」を想定しているのだろう。しかし、この②鏡には王莽の「新」王朝において「丹陽」郡の銅官が選別し精錬した「善銅」を用いて少府属官の「尚方」の命により「巧工」が制作した「御鏡」、すなわち王莽宮廷鏡であることを記した銘文がある。岐阜県美濃観音寺山古墳出土の⑧鏡もまた王莽の制作にかかる「王氏昭」鏡で、径22.6cm、現状の重さ1164g、②鏡に近い重厚な優品である。紋様は同じように摩滅し、副葬時の破碎により10片に割れた状態で出土した(図1下)。その銘文には、四方の蛮夷が帰服して太平の世がふたたび訪れ、季節が順調にめぐって五穀豊穰の恵みがあるという王莽の治世が称揚されている。このような銘文をもつ鏡が王莽を打倒して成立した後漢王朝のもとで制作されたり宝鏡として伝世されたりしたというのは、先史学の仮説として成り立つとしても、歴史学的には成立しがたい。

②鏡と同型式の「尚方御」鏡は楽浪郡の所在したピョンヤンから3面出土している。そのうち貞悟洞1号墓出土鏡〔사회과학원고고학연구소1983〕と伝ピョンヤン付近出土鏡〔梅原・藤田1959〕は、紋様の構成と表現、9句63字からなる銘文、面径が、②鏡とほとんど同じである。これに対して石巖里200号墓出土「尚方御」鏡〔榎本編1974〕は、これら3面と比べると、表現はやや形式化し、銘文は6句39字に短くなっている。しかし、第2句に「名師作之出雒陽」とあり、洛陽の官営工房

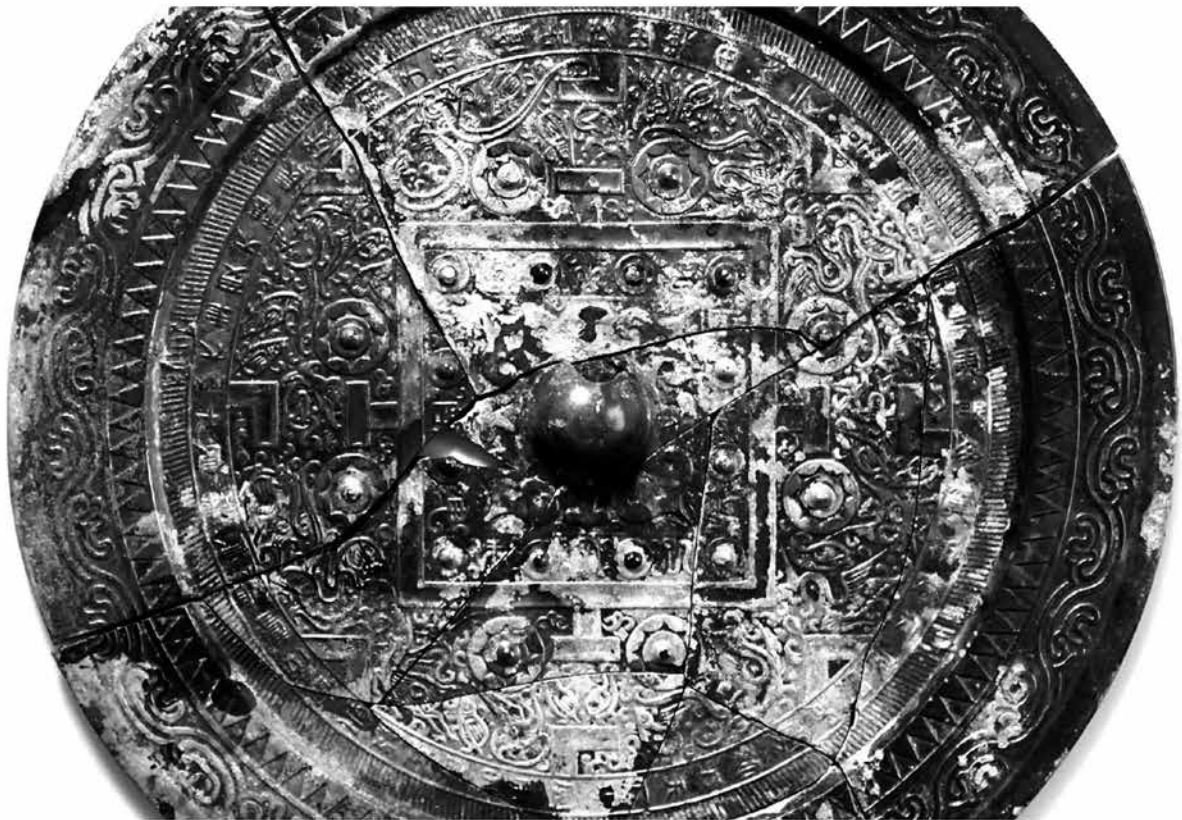
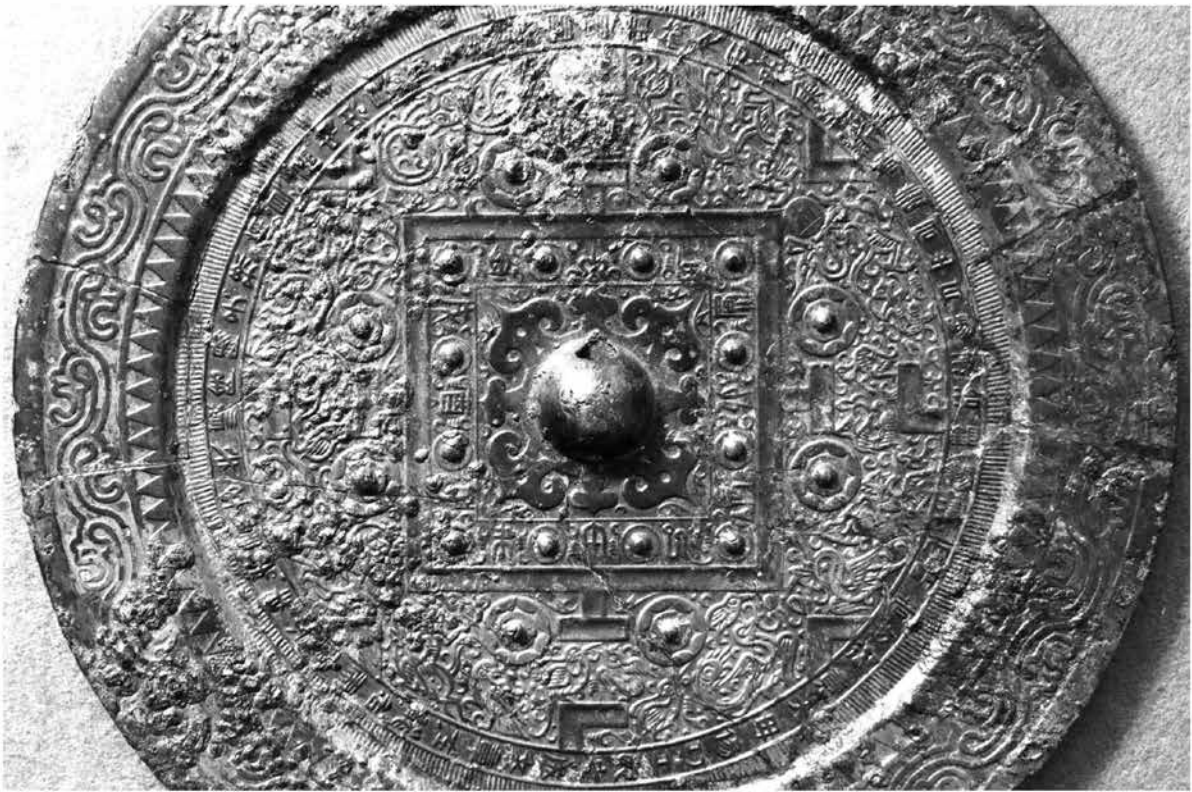


図1 新莽期の方格規矩四神鏡IV A 式 (岡村撮影)
上: 大阪府紫金山古墳出土「尚方御」鏡 (京都大学考古学研究室保管)
下: 岐阜県美濃観音寺山古墳出土「王氏昭」鏡 (美濃市教育委員会保管)

で「名師」が制作したことをうたっている。

とくに「尚方御」鏡の出土した貞梧洞1号墓には始元二年（前85）「蜀西工」漆器3点と元始五年（後5）「蜀郡西工造乘輿」漆器1点、石巖里200号墓には「成都郡工官造乘輿」漆器1点がともなっている。「成都」は蜀郡治、「乘輿」は皇帝の用いる車馬・衣服・器械・百物を意味する（蔡邕『独断』上）。楽浪漢墓からは始元二年（前85）から永元十四年（102）までの紀年銘漆器が多数出土し、榎本・町田〔1974〕の集成では計67点を数える。そのうち「考工」「右工」「供工」という中央工官の漆器は10点、「蜀郡西工」「広漢郡工官」など地方工官の漆器は57点を数える。とりわけ地方工官のそれは、ほとんどが器名の前に「乘輿」を冠し、制作に関与した官吏の名を「臣某」と刻んでいることから、民間の市場に流通するような什器ではなく、宮廷に納品され使用された後、楽浪郡の官吏に下賜されたものと考えられる。榎本らはまた王莽期の元始四年（後4）銘漆器が12点、初始元年（後8）銘漆器が10点と多いことに注意し、それらは王莽が撫恤政策の一環として特別に賜与したものと推測している〔榎本・町田1974〕。したがって、「乘輿」漆器と共伴した「尚方御」鏡も同じようにいったん宮廷に納入されて用いられた後、王莽によって一括で楽浪郡にもたらされた可能性が高い〔岡村2011〕。ちなみに、同じ王莽鏡でも「漢有善銅」方格規矩四神鏡Ⅲ式の出土した貞梧洞10号墓と同11号墓では、王莽から下賜されたような宮廷用品がともなっていない〔사회과학원고고학연구소1983〕。井原鏈溝などからも出土している「漢有善銅」鏡は、淮南から市場交易をへて楽浪郡にもたらされたからであろう。このことから、紫金山②鏡もまた宮廷で用いられていた「乘輿」漆器などといっしょに楽浪郡にもたらされ、王莽の命により倭人に下賜されたと考えられる。

⑧鏡の出土した美濃観音寺山古墳は、⑦鏡の出土した瑞龍寺山から20kmほど長良川をさかのぼったところにある全長21mの前方後方墳である。棺内から⑧鏡に重なって弥生小形仿製鏡が出土し、鉛同位体比は両面とも前漢鏡タイプの領域Aに属している〔魯ほか2012〕。土器は細片だが、報告者は古墳出現期の廻間Ⅱ式（庄内式新段階併行）に位置づけている〔高木2012〕。⑧鏡のような「王氏昭（作）」鏡は、制作からほどなくして王莽が滅んだこともあって、楽浪郡の所在したピョンヤン周辺はもとより中国でも確かな発掘例はほとんどない〔岡村2019〕。したがって、⑧鏡は②鏡と同じように王莽の在世中に下賜された可能性が高く、瑞龍寺山の⑦鏡と同じように弥生後期はじめのうちに美濃東部にもたらされたのであろう。

漢鏡4期後半の内行花紋鏡は、鈕座の「長冝子孫」以外に銘文がないため、歴史的な考察はむずかしい。しかし、北部九州出土鏡はすべて径19cm未満であるのに、備前以東から出土した①・③・④・⑤・⑦・⑨鏡はいずれも径22cmをこえている。なかでも京都府椿井大塚山古墳出土の④鏡は径27.8cmとひとまわり大きく、広陵国の王族墓と考えられる江蘇省邗江県宝女墩104号墓やモンゴルのゴル・モドⅠ墓地出土鏡も径27cmあまりの大きさで、どちらも工官漆器がともなっている。ちなみに、兵庫県立考古博物館蔵千石コレクション140鏡は、径27.2cm、重さ1955gの優品で、それと椿井大塚山④鏡と紫金山②鏡の鉛同位体比は誤差の範囲で近接している。しかも、千石140鏡と「丹陽」産の「善銅」を用いている紫金山②鏡のICP分析によれば、銅に由来する微量元素のヒ素やアンチモンの濃度がそれぞれ0.004%の差しかない。このため、椿井大塚山④鏡をはじめとする大型の内行花紋鏡もまた王莽宮廷鏡であった可能性が高い〔岡村2024b〕。また、楽浪漢墓から出土した4期後半の内行花紋鏡をみると、石巖里194号墓では始元二年（前85）から元始三年（後3）までの工官漆器にともなって径22.1cmの鏡が出土し〔榎本編1974〕、石巖里9号墓では居撰三年（後8）

「蜀郡西工造乘輿」漆器にともなって径 22.1cm と径 19.7cm の 2 面が出土している〔朝鮮総督府 1927〕。このため、これら径 19cm をこえる内行花紋鏡もまた王莽から政治的に賜与された可能性が高い。

以上のように径 22cm 以上の 4 期後半鏡は、②「尚方御」鏡や⑧「王氏昭」鏡などをふくみ、王莽から楽浪郡を經由して政治的に賜与された可能性が高い。また、北部九州を飛びこえ、すべて備前から遠江までの範囲に分布していることから、その地域が王莽と交渉した「東夷王」の活動域であったと推定できる。結論からいえば、近畿を中心とするその地域は近畿式銅鐸の分布域にほぼ合致し、その画一的な銅鐸原料は王莽から贈られた可能性が高く、100 年後にはその地域が倭国王帥升の成立基盤になったと考えられる〔岡村 2024b〕。次にそれを詳しく検討しよう。

3 鉛同位体比と漢鏡からみた突線鈕式銅鐸の年代

弥生時代の北部九州では銅剣・銅戈・銅矛という武器形青銅器が主に生産され、おおむね細形→中細形→中広形→広形と変化した。銅剣は山陰や北四国にも拡がり、それぞれの地域で独自の中細形銅剣や平形銅剣が生産された。これに対して近畿を中心に生産されたのが銅鐸である。それは吊り下げる鈕の形によって菱環鈕式→外縁付鈕式→扁平鈕式→突線鈕式という編年が組み立てられている（以下、銅鐸の分類と出土地は難波洋三〔2007〕による）。

突線鈕式銅鐸はさらに 5 型式に細分され、突線鈕 2 式の段階に近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の 2 大系統が分立する。その年代について難波〔2012〕は弥生後期中葉前後に想定するが、愛知県朝日遺跡で発掘された突線鈕 1 式銅鐸の埋納坑は弥生中期末・後期初頭、岡山市高塚遺跡にて発掘された突線鈕 2 式（近畿式）銅鐸の埋納坑は弥生後期はじめごろと報告されているため、近畿式・三遠式銅鐸の成立は弥生後期はじめと考えられる〔岡村 2024a〕。とはいえ、それらはあくまでも土器編年にもとづく銅鐸の埋没年代であり、銅鐸の制作年代を直截に示すものではない。共同体祭器として用いられた銅鐸は、古墳出土漢鏡と同じように長く伝世し、制作から埋没までの使用期間は考古学からは知りえないからである。しかも、土器をとまなう銅鐸埋納坑はそれら数例しかなく、制作年代や埋没年代を決める根拠はきわめて薄弱である。

ところが、青銅器の原料産地を推定する鉛同位体比法によって、漢鏡や弥生青銅器の原料はすべて大陸産であり、時間的に遷移していることが明らかになっている。すなわち、漢鏡の鉛同位体比は前漢鏡タイプの領域 A（華北産）から後漢鏡タイプの領域 B（華中・華南産）へ、弥生青銅器は弥生中期に朝鮮半島系遺物のライン D から領域 A へと遷移し、弥生後期の広形銅矛や近畿式・三遠式銅鐸は領域 A 内のごく狭い領域 a（ $^{207}\text{Pb} / ^{206}\text{Pb} = 0.8763 \pm 0.0008$ ）に画一化した後、古墳時代になって領域 B に変化している〔馬淵・平尾 1982 / 同 1983〕。その領域 a について馬淵らは華北の同一鉱山に由来する「規格品の原料」と指摘しているから、その原料は弥生後期を通じて流入しつづけたというよりも、漢鏡などの中国青銅器が領域 A から領域 B へと遷移する 1 世紀中葉までの間にまとめてもたらされたと考えられる。すなわち、漢鏡と同じように鉛同位体比は青銅原料の暦年代を直截に示すため、中国産の青銅原料を用いた弥生青銅器についてもあえて土器編年にもとづく埋没年代を議論する必要はないのである。

この方法をもとに弥生青銅器の暦年代を検討すると、北部九州の中細形銅矛は福岡県須玖岡本 D 地点・三雲南小路 1 号・立岩 10 号甕棺墓において 3 期後半鏡がともない、広形銅矛は領域 a 原

料を用いているから、中間型式の中広形銅矛はおよそ漢鏡4期前半に併行する。また、島根県荒神谷遺跡では北部九州の中細形銅矛2本と中広形銅矛14本が一括出土し、その鉛同位体比はラインDが4本、領域Aが10本、両種の混合が2本であり、隣接して一括埋納された中細形銅剣358本はラインDが1本、ラインDと領域Aの混合が14本、のこりはすべて領域Aである。同じように東京国立博物館に所蔵する香川・愛媛・徳島県出土の平形銅剣21本は、ラインDが2本、ラインDと領域Aの混合が1本、のこりは領域Aに位置し、荒神谷の中細形・中広形銅矛や中細形銅剣に類似する鉛同位体比の構成である(表1)。このように北部九州の中細形・中広形銅矛、山陰の中細形銅剣、瀬戸内の平形銅剣は、領域A原料を主としながら一部にラインD原料を用いている。つまり、山陰や瀬戸内の銅剣工人は北部九州からそうした少量のラインDをふくむ領域A原料を入手していたと考えられる。その年代はおよそ漢鏡3期後半～4期前半に併行する〔岡村2024a〕。これに対して銅鐸は、外縁付鈕1式を最後としてラインD原料を用いていないため、それ以後の銅鐸工人は北部九州とは異なるルートで青銅原料を輸入していた可能性がある。

その後、銅鐸の鉛同位体比は突線鈕2式の段階に領域A内の領域aに収斂し、同時に“聞く銅鐸”から“見る銅鐸”へと巨大化する〔田中1970〕。難波洋三〔2024〕の推算によれば、領域A原料を用いた“聞く銅鐸”は800個あまり作られ、総重量は2トンあまり、領域a原料を用いた近畿式・三遠式の“見る銅鐸”は500個あまり作られ、総重量は約7トンにおよぶという。つまり“見る銅鐸”の総数は“聞く銅鐸”よりも少ないが、巨大化によって総重量は3倍以上に増大したと推量される。ちなみに、北部九州の広形銅矛は三遠式銅鐸と同じくらいで約1.5トンである〔難波2024〕。

表1 中四国出土武器形青銅器の鉛同位体比

遺跡	器種	鉛同位体比			参考文献
		ラインD	混合	領域A	
島根県荒神谷遺跡	中細形・中広形銅矛	4	2	10	馬淵ほか1996
	中細形銅剣	1	14	342	
香川県瓦谷・我拝師山・羽方西ノ谷遺跡 愛媛県道後今市北・垣添遺跡、徳島県	平形銅剣	2	1	18	井上ほか2002

表2 漢鏡と弥生青銅器の編年

漢鏡	弥生年代	鉛同位体比	北部九州	山陰	北四国	近畿	東海	
3期後半	中期後葉	領域A	中細形銅矛	中細形銅剣	平形銅剣	扁平鈕式新段階銅鐸		
4期前半			中広形銅矛			1		突線鈕1式銅鐸
4期後半	後期前葉	領域a	広形銅矛			2	三遠式銅鐸	
5期前半						3		近畿式銅鐸
5期後半						4		
6期前半	庄内式前期				5			

これまで銅鐸原料は楽浪郡から北部九州を經由して近畿にもたらされたと考えられてきたが、約7トンにおよぶ領域a原料が楽浪郡から直接まとまって輸入され、それをを用いた突線鈕2式の近畿式・三遠式銅鐸の分布圏と径22cm以上の王莽鏡の分布圏とがほぼ重なっていることからみれば、それらは経済的な交易で流入したというよりも、主に王莽の政治的な動機によってもたらされたと推測される。それはちょうど「東夷王が大海を渡りて国珍を奉じた」という時期にあたっているため、その来貢を嘉した王莽が②「尚方御」鏡などの宮廷鏡といっしょに手厚く領域a原料を送り届けた可能性が高い〔岡村2021〕。

突線鈕2式の近畿式銅鐸は近畿東部の“大福型”と中四国東部の“迷路派流水文”の工人集団、三遠式銅鐸は“東海派”の工人集団を核とし、それぞれ瀬戸内東部の“横帯分割型”の工人集団が関与して生みだされたという〔難波2021〕。たんに突線鈕2式の近畿式・三遠式銅鐸と領域a原料が同時期に出現したというだけでなく、大量にもたらされた領域a原料が、これら地域をまたいだ銅鐸工人集団の統合をうながし、“聞く銅鐸”から“見る銅鐸”への大型化を可能にしたことは想像に難くない〔岡村2024a〕。

以上のように、領域a原料を用いた突線鈕2式の近畿式・三遠式銅鐸は、王莽期（1世紀第1四半期＝漢鏡4期後半）に出現したと考えられる（表2）。これは制作年代であり暦年代でもあるため、あえて土器編年にもとづく埋没年代を論じる必要はないが、それは愛知県朝日遺跡と岡山市高塚遺跡の銅鐸埋納坑をもとに突線鈕2式銅鐸の成立を弥生後期はじめに比定する上述の私見、および貨泉と土器との「共伴」関係によって弥生後期のはじまりを1世紀前半に位置づける通説とも整合している〔岡村2024a〕。しかしながら、領域a原料は銅鐸の終焉まで連綿と用いられているため、つづく突線鈕3～5式銅鐸の制作年代については、次節に検討するような分布論による先史学的な状況証拠によらざるをえない。

日本出土漢鏡の編年について前稿では漢鏡5期を前後の小期に分けずに収録したので、本稿では5期前半鏡（表3）・5期後半鏡（表4）・6期前半鏡（表5）について地名表を掲載する。ただし、小さな鏡片など細かい型式判定のむずかしい鏡は割愛している。また、本稿では方格規矩四神鏡VA・VB式や内行花紋鏡四葉座I・II式を漢鏡5期前半、方格規矩四神鏡VC式や内行花紋鏡四葉座III・IV式を漢鏡5期後半、西王母・東王公という陰陽二神をあらわした建初八年（83）「呉朱師作」鏡など呉派の画像鏡や「青蓋作」「尚方名工杜氏造」「淮南龍氏作」鏡など章帝（在位75-88）期の盤龍鏡を漢鏡6期前半に位置づけている。

以上、1世紀第1四半期の王莽期（＝漢鏡4期後半）に位置づけた突線鈕2式の近畿式・三遠式銅鐸を基準に、本稿では次のような銅鐸と漢鏡との相対編年を用いる⁽⁹⁾。

突線鈕1式銅鐸≡漢鏡4期前半（前1世紀後葉）

突線鈕2式銅鐸≡漢鏡4期後半（1世紀第1四半期）

突線鈕3式銅鐸≡漢鏡5期前半（1世紀第2四半期）

突線鈕4式銅鐸≡漢鏡5期後半（1世紀第3四半期）

突線鈕5式銅鐸≡漢鏡6期前半（1世紀第4四半期～2世紀はじめ）

表3 日本出土の5期前半鏡(★は破碎鏡、▲は破鏡)

都府県	市町村	遺跡名	墳形	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成						
福岡	福岡市	那珂遺跡群 69次		SC041 竪穴住居址	弥生後期中頃	内行花紋鏡	四Ⅱ式		▲	鉛領域 A	福岡 610-1						
		鋤崎古墳	前方後円墳 62	横穴式石室	古墳中期	内行花紋鏡	四Ⅱ式	14.8			福岡 162						
	糸島市	平原1号墓	方形周溝墓	割竹形木棺	弥生末期	超大型内行花紋鏡 10		46.5	★	鉛領域 AL	福岡 106-141						
						超大型内行花紋鏡 11		46.5	★	鉛領域 AL							
						超大型内行花紋鏡 12		46.5	★	鉛領域 AL							
						超大型内行花紋鏡 13		46.5	★	鉛領域 AL							
						超大型内行花紋鏡 14		46.5	★	鉛領域 AL							
						尚方佳方格規矩鏡 1	Ⅳ B 式	23.4	★	鉛領域 AL							
						尚方作方格規矩鏡 2	Ⅳ B 式	21.0	★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 3	Ⅳ B 式	21.0	★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 4			★	鉛領域 AH							
						□□作方格規矩鏡 5	V A 式	18.4	★	鉛領域 AL							
						尚方作方格規矩鏡 6	V A 式	18.5	★	鉛領域 AL							
						尚方作方格規矩鏡 7			★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 8	V B 式	16.1	★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 9			★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 18	V A 式	16.1	★	鉛領域 AL							
						尚方佳方格規矩鏡 19	V B 式	15.9	★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 20	V A 式	18.5	★	鉛領域 AL							
						尚方佳方格規矩鏡 21	Ⅳ B 式	20.7	★	鉛領域 AL							
						尚方作方格規矩鏡 22	V A 式	18.7	★	鉛領域 AL							
						尚方作方格規矩鏡 23	Ⅳ B 式	19.1	★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 24			★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 25	V A 式	18.8	★	鉛領域 AH							
						尚方作方格規矩鏡 26			★	鉛領域 AL							
						尚方佳方格規矩鏡 27	V A 式	15.8	★	鉛領域 AL							
						尚方作方格規矩鏡 28	Ⅳ B 式	18.2	★	鉛領域 AL							
						尚方佳方格規矩鏡 29	V A 式	16.5	★	鉛領域 AL							
						尚方佳方格規矩鏡 30	Ⅳ B 式	18.9	★	鉛領域 AL							
						陶氏作方格規矩鏡 31	V A 式	18.6	★	鉛領域 AH							
						陶氏作方格規矩鏡 32	V A 式	18.8	★	鉛領域 AH							
						陶氏作方格規矩鏡 33			★	鉛領域 AH							
						陶氏作方格規矩鏡 34	V A 式	16.6	★	鉛領域 AH							
						陶氏作方格規矩鏡 35			★	鉛領域 AH							
						陶氏作方格規矩鏡 36	V B 式	16.2	★	鉛領域 AH							
						陶氏作方格規矩鏡 37	V B 式	16.4	★	鉛領域 AH							
						陶氏作方格規矩鏡 38	V A 式	18.8	★	鉛領域 AL							
						陶氏作方格規矩鏡 39			★	鉛領域 AH							
							一貴山鏡子塚古墳	前方後円墳 103	竪穴式石室	古墳前期		方格規矩鏡	V A 式	21.7			福岡 5・6
												内行花紋鏡	四Ⅱ式	21.7			
												4号石棺墓				鉛領域 B	福岡 82
						6号木棺墓				鉛領域 A	福岡 103-1						
		春日市	松添遺跡水田遺構		洪水砂	鎌倉以降	方格規矩鏡	V A 式?	15.8			福岡 614-2					
		大野城市	御陵6号墳	?	第2主体部	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅱ式?				福岡 282					
		北九州市	高島		1号箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅱ式		▲		福岡 587					
		福智町	宝珠		箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅱ式	15.6			福岡 597					
		朝倉市	山田後山		箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅱ式?	14.9	▲ 1孔		福岡 433.435					
	小郡市	三沢栗原遺跡		43号住居址	古墳前期	内行花紋鏡			▲ 2孔	鉛領域 A	福岡 508						
佐賀	唐津市	桜馬場		甕棺墓	村徳永3式	方格規矩鏡	Ⅳ B 式	23.2			佐賀 148						
		中原9-2区		O-27区画包含層		方格規矩鏡	V 式	12.2	▲		佐賀 187-1						
		半田大園C区		包含層		方格規矩鏡	V 式	11.8	▲		佐賀 138-1						
	鳥栖市	長ノ原		3号住居址	弥生後期後半	方格規矩鏡	V 式?	14.6	▲		佐賀 4						
	上峰町	五本谷		75号土坑墓	弥生	方格規矩鏡	V 式?	11.8	▲		佐賀 26						
	神埼市	城原北外		採集		内行花紋鏡		20.0	▲		佐賀 64						
	吉野ヶ里町	横田(松原)		甕棺墓?	弥生	尚方作方格規矩鏡	V A 式	17.5				佐賀 36					
松葉(在川)			箱式石棺墓	弥生後期	方格規矩鏡	V A 式	14.7				佐賀 33						

都府県	市町村	遺跡名	墳形	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成
佐賀	佐賀市	池ノ上				方格規矩鏡	V A 式?	17.4			佐賀 92
		七ヶ瀬 3区		SP3214 木棺墓	弥生後期	尚方作方格規矩鏡	V B 式	14.0	★		市速報展 2021
	小城市	寄居 ST01 古墳	円墳 12 ~ 15	第 1 主体部	古墳初期	尚方作方格規矩鏡	V A 式	17.7	★		佐賀 113
長崎	武雄市	枕島山		箱式石棺	弥生後期	方格規矩鏡	V B 式	13.1		鉛領域 B	佐賀 179
	志岐市	車出		土器溜り	弥生後期	方格規矩鏡	V 式	10.7			長崎 73
	東彼杵町	白井川 F3 区		包含層	弥生中後期	方格規矩鏡	V 式	15.0			長崎 67
熊本	山鹿市	大道小学校		採集		方格規矩鏡	V A 式	17.0	▲ 1 孔		熊本 17
	玉名市	大原 2 区		S 2 住居址	弥生後期	内行花紋鏡	四 I / II 式		▲		熊本 6-2
	菊池市	小野崎 年賀塚 I 区		溝 SD-08 下層	弥生	方格規矩鏡			▲		熊本 116-3
		小野崎 年賀塚 III 区		竪穴住居 SH-27	弥生	方格規矩鏡			▲		熊本 116-12
	熊本市	二本木 6 区		竪穴建物 SI16	弥生後期	方格規矩鏡			▲		熊本 51-2
		戸坂		採集		内行花紋鏡	四 I 式?	15.0	▲		熊本 49
	山都町	枯木原		採集		方格規矩鏡?	V 式?	14.5			熊本 70
あさぎり町	本目 SK12 墳丘墓		木棺	弥生後期	方格規矩鏡	V 式?		▲ 1 孔		熊本 101-1	
鹿児島	鹿児島市	不動寺		H23-4SR10	弥生・古墳	方格規矩鏡	IV B 式?	13.5	▲	鉛領域 A	鹿児島 2-1
	薩摩川内市	麦之浦貝塚 11-J 区		包含層	古墳前中期	方格規矩鏡	IV B 式?		▲		鹿児島 5
大分	宇佐市	宮ノ原		採集		方格規矩鏡?		13.2	▲		大分 23
			12 号竪穴	弥生後期?	方格規矩鏡?		10.4	▲		大分 24	
	上原		11 号住居址	弥生後期	内行花紋鏡	四 II 式?		▲		大分 18	
	豊後高田市	割掛		4 号箱式石棺墓	弥生～古墳初	方格規矩鏡?		17.5	▲		大分 87
	大分市	尼ヶ城		住居址		方格規矩鏡?		16.5	▲ 2 孔		大分 34
		大道第 4 次		遺構外		方格規矩鏡?			▲ 1 孔		大分 96-1
	豊後大野市	二本木		34 号住居址	弥生後期	内行花紋鏡	四 II 式?		▲		大分 60
玖珠町	おごもり II 区		土坑墓		内行花紋鏡	四 I / II 式		▲		大分 72	
九重町	井尻日焼田		SH16 住居址	古墳前期	内行花紋鏡	四 I / II 式		▲		大分 93-3	
愛媛	今治市	相の谷 9 号墳	方形台状墓	箱式石棺	古墳前期	方格規矩鏡?	V 式?	17.0	▲ 1 孔	鉛領域 A	愛媛 13
高知	春野町	西分増井 I A 区		包含層	弥生後期	内行花紋鏡			▲ 1 孔	鉛領域 A	高知 7-2
	南国市	田村 Loc.34B		SP1 水溜状遺構	弥生後期中葉	方格規矩鏡	V 式	15.3	▲		高知 6
		田村 Loc.45		ST1 住居址	弥生後期後葉	方格規矩鏡	V 式	16.5	▲		高知 8
山口	下関市	柳瀬		土坑 LX007	弥生後期後半	内行花紋鏡	四 II 式?		▲		山口 71
広島	北広島町	壬生西谷		SK33 土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	四 II 式	16.3		鉛領域 A	広島 25
	広島市	月見城 ST2 古墳	方墳 6	a 主体木棺	古墳中期	内行花紋鏡	四 II 式?	16.2	▲	鉛領域 A	広島 3
	安芸高田市	青迫 2B 区		包含層	弥生後期	方格規矩鏡	V 式?	17.7	▲		広島 106
福山市	神辺御領 E 地点		SD09 最上層	古墳初期	獸帯鏡	IV 式?		▲ 2 孔		広島 76	
岡山	岡山市	津寺 A(郷境) 4 号墳	方形周溝墓	組合式木棺	古墳初期	内行花紋鏡	四 II 式?	14.4	▲ 2 孔		岡山 45
兵庫	佐用町	西ノ土居	台状墓 14 × 8	竪穴式石室	弥生後期?	内行花紋鏡	四 II 式?	18.8	▲		兵庫 166-1
	上郡町	井の端 7 号墳	台状墓 16 × 10	箱式石棺	古墳前期	内行花紋鏡	四 II 式?	13.7	▲		兵庫 257
	神戸市	吉田南		5 号住居址	庄内式	内行花紋鏡	四 II 式		▲ 1 孔		兵庫 70
奈良	生駒市	竹林寺古墳	前方後円墳 45	竪穴式石室?	古墳前期	内行花紋鏡	四 II 式	?			奈良 62
	天理市	大和天神山古墳	前方後円墳 105	竪穴式石室	古墳前期	方格規矩鏡 1	IV B 式	23.4		鉛領域 AL	奈良 86
						尚方作方格規矩鏡 8	IV B 式	20.3		鉛領域 A-B	奈良 93
						尚方作方格規矩鏡 9	IV B 式	20.8		鉛領域 AL	奈良 94
						尚方作方格規矩鏡 16	V A 式	15.9		鉛領域 AL	奈良 101
						方格規矩鏡 19	V A 式?	16.0		鉛領域 AL	奈良 104
方格規矩鏡 21	V 式	14.0		鉛領域 B	奈良 106						
桜井市	ホケノ山古墳	前方後円墳 86	石積木椁	弥生末期	内行花紋鏡	四 II 式	26.3			奈良 121-4	
	桜井茶白山古墳	前方後円墳 207	竪穴式石室	古墳前期	方格規矩鏡 35-①	V A 式?		破片		奈良 146	
京都	八幡市	ヒル塚古墳	方墳 52	第 1 主体粘土椁	古墳前期	方格規矩鏡?			破片	京都 247	
滋賀	大津市	上高砂		包含層	古墳前期?	方格規矩鏡	V 式?		▲		滋賀 3
	栗東市	十里		旧河道(大溝 101)	弥生末期	内行花紋鏡?		19.0	▲ 2 孔		滋賀 37-1
岐阜	関市	砂行		SBE01 住居址	弥生後期	方格規矩鏡	V A 式?		▲ 1 孔		岐阜 162
	大野町	笹山古墳	前方後方墳 50	?	古墳前期	内行花紋鏡	四 II 式	17.6			岐阜 55
愛知	新城市	石座神社		竪穴住居 3002SI	古墳前期前半	方格規矩鏡	V A 式?		▲ 2 孔	鉛領域 A	愛知 87-1
石川	押水町	宿東山 1 号墳	前方後円墳 22	箱形木棺	古墳前期	尚方作 方格規矩鏡	V A 式	18.0			石川 8
	加賀市	分校カン山古墳	前方後円墳 34	箱形木棺	古墳前期	尚方作 方格規矩鏡	V B 式	16.4			石川 26
群馬	太田市	頼母子古墳	円墳?	粘土椁?	古墳前期	尚方作 方格規矩鏡	V A 式?	17.8			群馬 174

表4 日本出土の5期後半鏡(★は破砕鏡、▲は破鏡)

都府県	市町村	遺跡名	墳形	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成		
福岡	福岡市	羽根戸南 G-3 号墳	前方後円墳 20	割竹形木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式?	16	▲ 2 孔	鉛領域 B	福岡 606		
		日佐原 E 群		15 号石蓋土坑墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅳ式	13.5			福岡 196		
	春日市	天神ノ木		竪穴住居	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅲ式?	13.9			福岡 242-1		
	大野城市	原門		8 号土坑墓		内行花紋鏡	円Ⅱ式	9.8			福岡 206		
	嘉麻市	笹原		箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅳ式	12.5			福岡 392		
	宮若市	山口 (黄金塚)	不明	不明	?	内行花紋鏡	四Ⅳ式	15.4			福岡 406		
	田川市	伊加利		箱式石棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	18.5			福岡 550		
	香春町	宮原			3 号箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.5			福岡 554	
							内行花紋鏡	四Ⅳ式	12.3			福岡 555	
	上毛町	穴ヶ葉山		40 号石蓋土坑墓	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	17.3	▲		福岡 670		
	豊前市	塔田琵琶田 2 次Ⅱ区		66 号住居址	古墳中期前半	内行花紋鏡	四Ⅲ式?		▲ 1 孔		福岡 667		
	行橋市	稲童石並		箱式石棺墓	弥生	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲	鉛領域 B	福岡 562		
	小郡市	みくに保育所		1 号住居址	弥生後期後半	方格規矩鏡				鉛領域 B	福岡 510		
	筑前町	下町		15 号土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	円Ⅱ式	10.1	★		福岡 621		
久留米市	日渡遺跡 5 次		包含層		内行花紋鏡	四Ⅳ式	12.3			福岡 674-1			
佐賀	唐津市	中原 ST13414 墳丘墓	墳丘墓 16 × 13	中心主体部	惣座 0 式	内行花紋鏡	四Ⅲ式	20.7	★		佐賀 187-4		
						内行花紋鏡 1	四Ⅳ式	17.5	★		佐賀 187-5		
		中原 ST13415 墳丘墓	墳丘墓 10 × 11	中心主体部	惣座 1 式	内行花紋鏡 2	四Ⅳ式	19.0	★		佐賀 187-6		
				周溝内埋葬		方格規矩鏡	V C 式	18.1	★		佐賀 187-7		
	鳥栖市	藤木		SC201 石蓋土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	13.2	★		佐賀 199		
	武雄市	みやこ		SP305 箱式石棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式		▲		佐賀 173		
伊万里市	午戻		SC010 箱式石棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	19.7	★		佐賀 195			
長崎	杵岐市	原の辻原ノ久保 A	9 号土坑		弥生中後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	20			長崎 76		
			原の辻 604 番地		採集		内行花紋鏡	四Ⅲ式				長崎 76-1	
			原の辻石田大原		1b 整地層		内行花紋鏡	四Ⅲ式	18.5			原の辻所報 36	
平戸市	勝負田古墳	?	箱式石棺	古墳後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	13.8			長崎 53			
熊本	菊池市	小野崎 年賀塚Ⅲ区		竪穴住居 SH-10	弥生	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲		熊本 116-4		
	宇土市	向野田古墳	前方後円墳 86	竪穴式石室 + 石棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	17.0			熊本 77		
大分	大分市	雄城台 6 次		8 号住居址	弥生末期	内行花紋鏡	円Ⅱ式	9.7	▲ 1 孔		大分 37		
							内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	19.2	▲ 2 孔	鉛領域 B	大分 17	
	宇佐市	本丸		石蓋土坑墓	弥生後期	内行花紋鏡		8.2	▲		大分 67		
	竹田市	石井入口		75 号住居址	弥生後期	内行花紋鏡		12.6	▲		大分 97		
豊後大野市	鹿道原		168 号住居址	弥生後期	内行花紋鏡		12.6	▲		大分 97			
愛媛	今治市	別名一本松古墳	前方後円墳 31	第 2 木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	14.4			愛媛 91-2		
		高橋仏師 4 号墳	前方後円墳 23	箱形木棺	古墳前期	内行花紋鏡		14.8	▲ 2 孔		愛媛 91-5		
高知	春野町	馬場末Ⅱ B 区		溝 SD1	古代	内行花紋鏡			▲ 1 孔	鉛領域 B	高知 7-4		
香川	坂出市	川津中塚		-- --	弥生後期?	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲		香川 59-1		
	観音寺市	一の谷平塚地区		包含層	古墳?	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲		香川 89		
	東かがわ市	樋端		SPⅢ 06	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ式?	16.4	▲ 1 孔	鉛領域 B	香川 28-1		
徳島	徳島市	庄・蔵本		攪乱層	近世	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲		徳島 56		
	鳴門市	萩原 2 号墓	前方後円墳 27	積石木椁	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	14.6	▲		徳島 47-1		
	東みよし町	昼間正力地区		採集	?	内行花紋鏡	四Ⅲ式		▲		徳島 43		
	海陽町	寺山 1 号墳		墳丘流土	?	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲ 1 孔		徳島 44		
山口	周南市	八代北方		?		内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	14.8			山口 14		
	下関市	柳瀬 H 地区		土坑 LX007	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式				山口 71		
広島	安芸太田町	釜鋳谷		箱式石棺墓?	弥生~古墳初	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	18.7	▲		広島 2		
	北広島市	中出勝負峠 8 号墳	円墳 15	墳丘裾土坑墓	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式?	19.2	▲ 1 孔	鉛領域 B	広島 27		
	広島市	池の内	神宮山 1 号墳	前方後円墳 28	第 2 号住居址	弥生~古墳	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲		広島 6	
							内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	19.7	▲ 2 孔		広島 9	
島根	雲南市	土井・砂 1 号墳	方墳 10	第 2 剝板式木棺	古墳前期	内行花紋鏡		17.7	▲		島根 26-1		
	出雲市	白枝荒神		遺構外	弥生~古墳初	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	15	▲		出雲市報 38		
岡山	総社市	刑部		竪穴住居 37	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式?		▲	鉛領域 B	岡山県報 249		
	岡山市	湯迫車塚古墳	前方後方墳 48	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.4		鉛領域 B	岡山 96		
	鏡野町	竹田妙見山古墳	前方後円墳 36	割竹形木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式?	19	▲ 2 孔		岡山 194		
鳥取	鳥取市	青谷上寺地国道 2 区		包含層	弥生~古墳初	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲		鳥取 29-5		
				溝 SD09	弥生後期	内行花紋鏡		17	▲		鳥取 10		
				面影山 74 号墳	方墳 20 × 16	第 1 主体 木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	16.0	★		鳥取 8
				桂見 2 号墳	方墳 28 × 22	第 1 主体 木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	20.2	★		鳥取 6

都府県	市町村	遺跡名	墳形	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成	
兵庫	たつの市	岩見北山1号墓	円墳 18	竪穴式石室	弥生後期後半	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.4	★		兵庫 133	
		吉島古墳	前方後円墳 36	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.4			兵庫 156	
	姫路市	手柄山北丘西丘陵		?		内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲ 1孔		兵庫 127	
	加古川市	西条 52号墓	前方後円墳 35	竪穴式石室	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	18.4	★			兵庫 77
		長慶寺山1号墳	前方後円墳 35	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	20.9				兵庫 84
	小野市	敷地大塚古墳	円墳 47	粘土槨?	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式?	16.0			兵庫 106	
	高砂市	竜山 5号墳	前方後円墳 36	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	円Ⅱ式	9.1			兵庫 91	
	播磨町	大中		7号住居址	弥生後期後半	内行花紋鏡	四Ⅲ式		▲ 2孔		兵庫 76	
	神戸市	得能山古墳	円墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	15.5				兵庫 35
		会下山二本松古墳	前方後円墳 55	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	15.5				兵庫 33
	芦屋市	阿保親王塚古墳	円墳 36	?	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	16.4			兵庫 43	
	尼崎市	池田山古墳	前方後円墳 81	竪穴式石室?	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	18.1				兵庫 40
	朝来市	向山 2号墳	方墳 11 × 7	中心主体箱式石棺	古墳前期	内行花紋鏡	円Ⅰ式	10.2	★			兵庫 235
豊岡市	深谷 1号墳	方墳 20	第 2 箱式石棺	古墳前期	内行花紋鏡	?		▲ 鈕座			兵庫 203	
和歌山	和歌山市	太田黒田		採集	弥生後期?	内行花紋鏡	円Ⅰ式	10.0			1991年実見	
		岩橋千塚		採集		内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		▲ 2孔		和歌山 33	
	有田市	円満寺古墳		?	?	内行花紋鏡	四Ⅲ式	19.2			和歌山 38	
大阪	大阪市	大坂北 SX12 周溝		包含層	弥生後期	内行花紋鏡	四Ⅳ式		▲ 2孔		大阪 112	
		池島 IKS91-2 区		167 土坑	古墳前期	内行花紋鏡	?	8.9	▲ 1孔		大阪 247	
	東大阪市	石切劍箭神社				内行花紋鏡			破片		大阪 92	
奈良	奈良市	古市方形墳	方墳 32	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.1			奈良 40	
						内行花紋鏡	四Ⅳ式	19.8			奈良 80	
	大和郡山市	小泉大塚古墳	前方後円墳 88	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	15.5			奈良 81	
						内行花紋鏡	四Ⅳ式?	13			奈良 394・395	
	天理市	大和天神山古墳	前方後円墳 105	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡 3	四Ⅳ式	19.7		鉛領域 B	奈良 88	
						内行花紋鏡 4	四Ⅳ式	20.4		鉛領域 B	奈良 89	
						内行花紋鏡 17	四Ⅲ / Ⅳ式	15.4		鉛領域 B	奈良 102	
						内行花紋鏡 20	四Ⅲ式	23.8		鉛領域 B	奈良 105	
	桜井市	メスリ山古墳	前方後円墳 230	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		破片		奈良 153	
		池ノ内 1号墳	円墳 13	割竹形木棺	古墳前期	内行花紋鏡	円Ⅰ式	11.7			奈良 147	
御所市	桜井茶白山古墳	前方後円墳 207	竪穴式石室	古墳前期	細線式獸帯鏡 35-①	Ⅳ式		破片		奈良 146		
					細線式獸帯鏡 35-②	Ⅳ式		破片				
					内行花紋鏡 36-③	四Ⅲ / Ⅳ式		破片				
					内行花紋鏡 37-④	四Ⅲ / Ⅳ式		破片				
					内行花紋鏡 37-⑥	四Ⅲ / Ⅳ式		破片				
内行花紋鏡 37-⑦	四Ⅲ / Ⅳ式		破片									
御所市	西浦古墳	円墳 24	粘土槨	古墳前期	石氏作細線式獸帯鏡	Ⅳ式	14.8			奈良 301		
京都	木津川市	椿井大塚山古墳	前方後円墳 175	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式		破片		京都 220	
	城陽市	尼塚 4号墳	前方後円墳 35	不明	古墳	内行花紋鏡	四Ⅲ式	17.0			京都 240	
		西山 6号墳	円墳 10	不明	古墳	内行花紋鏡	四Ⅳ式	18.0			京都 230	
	福知山市	寺ノ段 2号墳	方墳 15	第 4 主体木棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	17.0	▲		京都 29	
	与謝野町	蛭子山 1号墳	前方後円墳 145	舟形石棺	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	15.1	摩滅		京都 14	
滋賀	栗東市	十里		旧河道(大溝 101)	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	19	▲ 2孔		滋賀 37-1	
	高月町	古保利小松古墳	前方後方墳 60	盗掘坑 B	弥生末期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	21.1	★?		滋賀 81-1	
三重	伊賀市	石山古墳	前方後円墳 120	東棺粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	10.2			三重 164	
	松阪市	清生茶白山古墳	円墳 55	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	20.3			三重 63	
岐阜	大野町	北山古墳	前方後方墳 83	?	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅳ式	12.8			岐阜 56	
	関市	大杉遺跡 16 次調査	竪穴式住居	埋土	古墳	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	12			岐阜 163-1	
	美濃加茂市	太田大塚古墳	円墳 32	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	16.3			岐阜 112	
愛知	豊田市	宇津木古墳	前方後方墳 54	?	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	15.9			愛知 82	
静岡	磐田市	豊田町広野	円墳	?	?	青蓋作獸帯鏡	細線Ⅳ式	14.1			静岡 61	
山梨	甲府市	中道鏡子塚古墳	前方後円墳 169	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ式	19.8		鉛領域 B	山梨 11	
	南アルプス市	長田口		5号溝状遺構	近世	内行花紋鏡?		11.4	▲ 2孔	鉛領域 B	山梨 49-1	
神奈川	逗子市	池子 No.2 地点		2号住居址	古墳前期	内行花紋鏡?		9.4	▲		神奈川 23	
	横浜市	日吉観音松古墳	前方後円墳 90	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	四Ⅲ / Ⅳ式	19.5			神奈川 5	
千葉	成田市	下方丸塚古墳	円墳	?	古墳前期	内行花紋鏡	円Ⅰ式	12.6			千葉 58	

表5 日本出土の6期前半鏡(★は破碎鏡、▲は破鏡)

都府県	市町村	遺跡名	墳形	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成	
福岡	福岡市	鋤崎古墳	前方後円墳 62	横穴式石室	古墳中期	双頭龍紋鏡	I 式	11.8			福岡 164	
		藤崎		箱式石棺墓	弥生~古墳初	方格規矩鏡	VII 式	9.1			福岡 176	
		天神森古墳	?	不明	古墳前期	盤龍鏡	II 式	9.9			福岡 202	
		仲島遺跡 5 次			弥生後期	内行花紋鏡	編 I 式	11.3			福岡市年報 32	
	糸島市	泊一区	?	箱式石棺墓?	古墳	浮彫式獸帯鏡	I 式	17.7		鉛領域 B	福岡 19-1	
		三雲寺口		2 号箱式石棺	弥生末期	内行花紋鏡	編 I 式	15.5		鉛領域 B	福岡 83	
	宇美町	神領 2 号墳	円墳 30	割竹形木棺	古墳前中期	内行花紋鏡	編 I 式	11.6			福岡 237	
	筑紫野市	阿志岐 F 地区		3 号住居址	弥生後期後半	内行花紋鏡	編 I 式	13.8	▲		福岡 216	
	太宰府市	宮ノ本 12 号墳	円墳 16	割竹形木棺	古墳前期	大山作浮彫式獸帯鏡	II 式	12.9			福岡 225	
	宗像市	久原 III - 4 号墳		粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	編 I 式	12.8	▲		福岡 289	
		馬場山		41a 号土坑墓	弥生後期	双頭龍紋鏡	I 式			鉛領域 B	福岡 425	
	北九州市	朽網		不明		方格規矩鏡	VI 式	11.2			福岡 647-6	
		高津尾 16 区北		40 号土坑墓	弥生	方格規矩鏡	VI 式	10.5	★	鉛領域 B	福岡 577	
	飯塚市	辻古墳	円墳 30	粘土槨	古墳前期	盤龍鏡	I 式	9.0	★		福岡 443	
		山ノ神古墳	前方後円墳 80	横穴式石室	古墳中期	王氏作盤龍鏡	I 式	12.6			福岡 397	
		谷頭		箱式石棺墓	弥生後期	内行花紋鏡	編 I 式	12.4			福岡 393	
		立岩 3 号墳?	円墳 9	?	古墳前期?	内行花紋鏡	編 I 式	13.6			嶋田 2021	
	福智町	三本松古墳	?	箱式石棺墓		内行花紋鏡	円 III 式	9.3			福岡 596	
	田川市	長谷池		2 号石蓋土坑墓	弥生後期	方格規矩鏡	VI 式	11.1			福岡 648	
	みやこ町	徳永川ノ上	I 号墳丘墓	8 号土坑墓	弥生末期	画像鏡?	淮派	13.0	▲	鉛領域 B	福岡 667	
			II 4 号墳丘墓	4 号箱式石棺	弥生末期	内行花紋鏡	編 I 式	13.0		鉛領域 A 外	福岡 662	
			IV 号墳墓群	19 号土坑墓	弥生末期	三羊作盤龍鏡	II 式	9.8			福岡 659	
		山鹿石ヶ坪		2 号箱式石棺	弥生後期	双頭龍紋鏡	I 式	16.6			福岡 535	
	久留米市	良積		14 号甕棺墓	K V c 式	方格規矩鏡	VI 式	9.2			福岡 642	
	大牟田市	潜塚古墳	円墳 25	2 号箱式石棺	古墳前期	内行花紋鏡	四 V 式	13.5	▲ 2 孔	鉛領域 B	福岡 486	
	佐賀	唐津市	久里双水古墳	前方後円墳 90	縦穴式石室	古墳前期	盤龍鏡	I 式	12.2			佐賀 187
	長崎	対馬市	椎ノ浦		7 号箱式石棺墓		内行花紋鏡	円 III 式	9.5			長崎 14-1
	大分	大分市	東大道 B 地区		遺構外	弥生後期?	方格規矩鏡?	VI 式		▲		大分 96-2
			神崎猫塚古墳	円墳	箱式石棺	古墳前期	浮彫式獸帯鏡	6 像?		▲ 1 孔		大分 52
		竹田市	石井入口		92 号住居址	弥生後期後半	画像鏡			▲		大分 69
	宮崎	高鍋町	持田 1 号墳 (計塚)	前方後円墳 100	縦穴式石室	古墳中期	青蓋作盤龍鏡	II 式	12.5			宮崎 9
	香川	丸亀市	快天山古墳	前方後円墳 98	縦穴式石室・石棺	古墳前期	方格規矩鏡	獸紋縁	18.6			香川 67
高松市		石清尾山猫塚古墳	双方中円墳 96	縦穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	編 I 式	14.0			香川 41	
さぬき市		古枝古墳	前方後円墳 35	縦穴式石室	古墳前期	方格規矩鏡	VI 式	11.2			香川 17	
広島	三原市	みたち 5 号墳	前方後円墳 30	箱式石棺	古墳前期	青羊作盤龍鏡	I 式	13.5			広島 37-1	
		江尻 1 号墳	円墳	箱式石棺	古墳中期	細線式獸帯鏡	VI 式	9.6			広島 38	
	福山市	石鏡山 2 号墳	円墳 16	組合式木棺	古墳前期	内行花紋鏡	編 I 式	12.8	▲	鉛領域 B	広島 72	
島根	松江市	月廻古墳	方墳 23	木棺	古墳前期	盤龍鏡	II 式	10.4			島根 16	
岡山	総社市	宿寺山古墳	前方後円墳 118	縦穴式石室	古墳	黄羊作盤龍鏡	I 式	13.8			岡山 19	
	岡山市	宗形神社古墳	円墳 14	箱式石棺	古墳前期	画像鏡?			▲		岡山 227	
	赤磐市	用木 1 号墳	円墳 32 × 26	割竹形木棺	古墳前期	尚方作浮彫式獸帯鏡	II 式	16.3			岡山 68	
	鏡野町	赤崎古墳	前方後円墳 45	割竹形木棺	古墳前期	青蓋作盤龍鏡	I 式	12.2			岡山 193	
鳥取	湯梨浜町	北山 1 号墳	前方後円墳 110	第 2 箱式石棺	古墳前期	尚方作盤龍鏡	I 式	13.8			鳥取 84	
兵庫	たつの市	白鷺山 1 号墓	台状墓	第 1 号箱式石棺	弥生末期	内行花紋鏡	編 I 式	10.0	▲		兵庫 146	
		西求女塚古墳	前方後方墳 98	縦穴式石室	古墳前期	浮彫式獸帯鏡	I 式			破片	兵庫 18	
	神戸市	東求女塚古墳	前方後円墳 80	縦穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四 V 式?	18.6			兵庫 9	
	尼崎市	池田山古墳	前方後円墳 71	縦穴式石室?	古墳前期	画像鏡		19.4			兵庫 39	
大阪	大阪市	加美 2 号墓	台状墓 8 × 7	組合式木棺	庄内~布留	内行花紋鏡	編 I 式	12.0	▲		大阪 114	
	高槻市	弁天山 B2 号墳	円墳 20	粘土槨	古墳前期	方格規矩鏡	VI 式	10.2			大阪 57	
	交野市	東車塚古墳	前方後円墳 65	割竹形木棺	古墳前期	盤龍鏡	II 式	9.9			大阪 78	
	柏原氏	田国分茶白山古墳	?	?	?	青蓋作盤龍鏡	I 式	13.9			大阪 125	
	河南町	寛弘寺 12 号墳	円墳 12	組合式木棺	古墳前期	盤龍鏡	II 式	10.7			大阪 186	
	東大阪市	池島・福万寺		包含層	古墳前期	方格規矩鏡	?		▲		大阪 260	
奈良	広陵町	黒石 5 号墳	前方後方墳 50	粘土槨	古墳前期	袁氏作画像鏡		20.8			奈良 279	
	桜井市	桜井茶白山古墳	前方後円墳 207	縦穴式石室	古墳前期	盤龍鏡 35-①			破片		奈良 146	
	橿原市	藤原宮第 118 次		東西溝 SD9633	?	内行花紋鏡	編 I 式	14.5			奈良 193-5	
	宇陀市	伝下芳野	不明	不明	?	駒氏作画像鏡	六像	19.5			奈良 349	

都府県	市町村	遺跡名	墳形	遺構	時期	鏡種	型式	径	状態	備考	下垣集成	
京都	木津川市	城山2号台状墓	台状墓	SX-09	弥生後期	浮彫式獸帯鏡?			▲		京都 252-1	
	長岡京市	長法寺南原古墳	前方後方墳 62	竪穴式石室	古墳前期	内行花紋鏡	四V A 式	13.1		鉛領域 B	京都 104	
						青蓋作盤龍鏡	II 式	11.7			京都 105	
	向日市	寺戸大塚古墳	前方後円墳 98	前方部竪穴式石室	古墳前期	浮彫式獸帯鏡	I 式	17.7			京都 90	
	福知山市	ヌクモ2号墳	方墳 10	組合式木棺	古墳前期	盤龍鏡	II 式	11.5				京都 246
												今林6号墳
	南丹市	園部垣内古墳	前方後円墳 82	粘土槨	古墳前期	□氏作盤龍鏡	II 式	14.3				京都 40
黒田古墳												前方後円墳 52
与謝野町	岩滝丸山古墳	円墳 30	箱式石棺	古墳前期	田生作画像鏡		21.4				京都 9	
滋賀	大津市	和邇大塚山古墳	前方後円墳 72	竪穴式石室?	古墳前期	青蓋作盤龍鏡	I 式	13.0		鉛領域 B	滋賀 22	
	栗東市	岡山古墳	円墳 20	粘土槨?	古墳前期	盤龍鏡	II 式	11.1			滋賀 34	
	長浜市	北山古墳	前方後円墳 43	割竹形木棺直葬	古墳中期	画像鏡	II 式	13.6	准派		滋賀 92	
三重	松阪市	浅間所在古墳	?	?	?	盤龍鏡	II 式	12.0			三重 75	
岐阜	岐阜市	龍門寺1号墳	円墳 24	粘土槨	古墳中期	方格規矩鏡	VI 式	15.7			岐阜 82	
	可児市	身隠御嶽古墳	円墳 36	粘土槨	古墳前期	内行花紋鏡	編 I 式	10.9			岐阜 121	
石川	金沢市	無量寺 B II 区		1号溝	弥生末期	双頭龍紋鏡	I 式		▲		石川 14	
新潟	胎内市	城の山古墳	前方後円墳 62	舟形木棺直葬	古墳前期	盤龍鏡	II 式	10.0			新潟 26-2	
静岡	袋井市	石ノ形古墳	円墳 27	箱形木棺直葬	古墳後期	三羊作画像鏡		18.2			静岡 80	
山梨	笛吹市	亀甲塚古墳	前方後円墳 40	竪穴式石室	古墳前期	盤龍鏡	I 式	13.8			山梨 32	
千葉	木更津市	中尾遺跡群東谷		64号住居址	古墳前期	双頭龍紋鏡	I 式?		▲		千葉 91	

4 漢鏡と銅鐸の地域動態

(1) 3期後半鏡と扁平鈕式新段階鐸

漢宣帝より日本列島の倭人に大量に賜与された3期後半鏡は、北部九州の甕棺地帯を中心に分布し、香川県石清尾山猫塚古墳から出土した径16.7cmの連弧紋銘帯鏡をのぞけば、中四国以東には小型鏡や破鏡が散発的に分布するのみである。北部九州で铸造された中細形銅矛も、このころ東方に拡散し、山陰では出雲、瀬戸内では讃岐にまでおよんでいる。

これに対して、前漢鏡タイプの領域A原料を用いた扁平鈕式新段階鐸は、大阪湾から紀伊水道の沿岸地帯を中心に140個ほど出土している。摂津の神戸市桜ヶ丘から一括出土した銅鐸14個のうち9個が扁平鈕式新段階鐸、のこり5個が外縁付鈕1式～扁平鈕式古段階鐸である。阿波の徳島市星河内から一括出土した6個の銅鐸はすべて“亀山型”であり、徳島市安都真では扁平鈕式の古段階鐸2個と“亀山型”新段階鐸2個がまとまって出土し、紀伊の御坊市亀山では“亀山型”新段階鐸が3個出土するなど、紀伊水道を挟んだ交流がうかがわれる。銅鐸は外縁付鈕式の段階から讃岐にも密に分布し、瀬戸内を通じた西方との海上交易が推測されるが、扁平鈕式新段階鐸はむしろ吉備から中国山地をこえて山陰へと拡がっている。すなわち、出雲市加茂岩倉の銅鐸は、出土した39個のうち扁平鈕式新段階鐸は9個で、のこりは外縁付鈕1式～扁平鈕式古段階鐸である。ここから3kmほど西北にある斐川町荒神谷では菱環鈕式～外縁付鈕1式銅鐸6個が埋納されている。出雲は早くから銅鐸分布圏の一角に位置し、石見でも浜田市城山から扁平鈕式古段階鐸が2個出土している⁽⁶⁾。また、江の川上流の広島県世羅町黒川下陰地から扁平鈕式新段階鐸1個、そこから川を下った石見の邑南町中野仮屋からは扁平鈕式新段階鐸と突線鈕1式鐸が1個ずつ出土している。銅鐸工人は石見・出雲を経由する日本海ルートを通じて楽浪郡と交易していたのかもしれない。

以上のように、扁平鈕式新段階鐸は石見まで展開したのに対して、近畿東部より東には分布が希薄であり、尾張以東の東海地方には扁平鈕式新段階鐸の確実な出土例がない。つづく突線鈕1式銅鐸になると、それが大きく変容する。

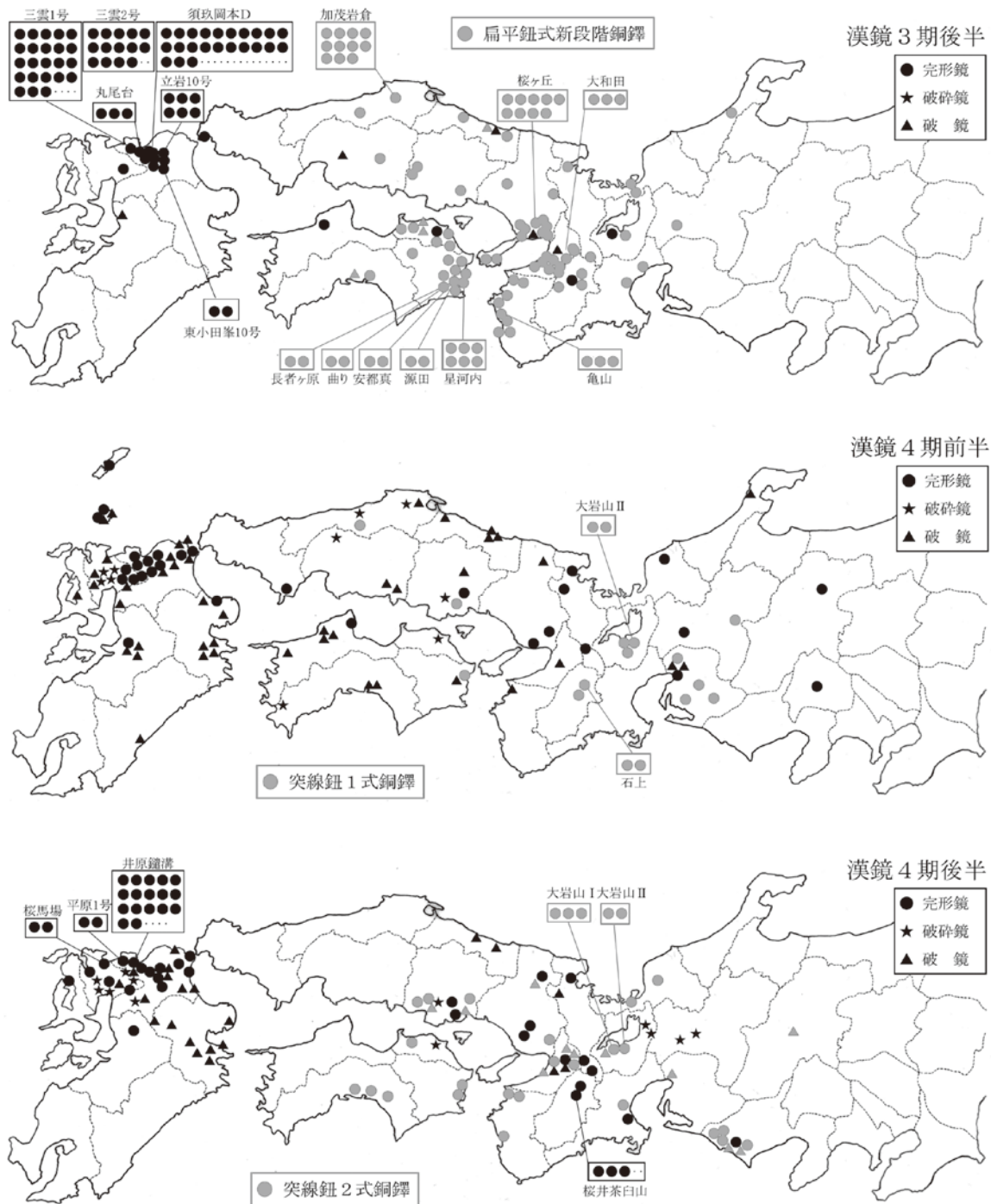


図2 漢鏡と銅鐸の時期別分布(1)

(2) 4期前半鏡と突線鈕1式銅鐸

4期前半鏡は糸島～福岡平野からの出土が激減するが、佐賀平野ではむしろ数が増え、甕棺地帯をこえて肥後・豊前・豊後から中四国・近畿・中部地方にまで拡散している。甕棺地帯の外では鏡を副葬する風習がなく、ほとんどが古墳出現期まで伝世した。破鏡も東方に分布が拡大し、同じように多くが古墳出現期に集落内に廃棄されたり墓に副葬されたりしている。

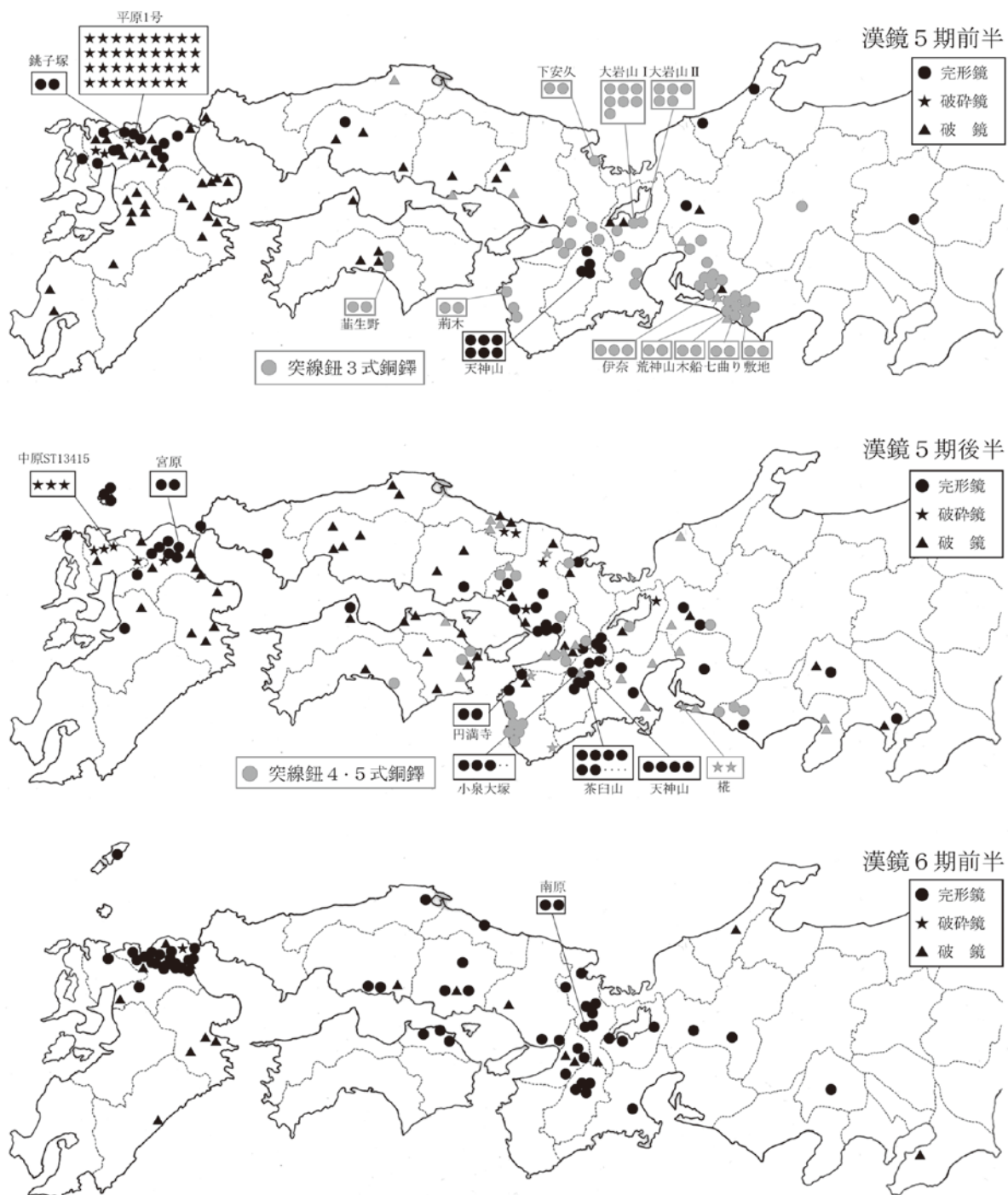


図3 漢鏡と銅鐸の時期別分布 (2)

北部九州で生産された中広形銅矛の出土数は中細形銅矛の約6倍に激増し、出雲の荒神谷では中細形の2本に対して中広形は14本に急増している。出雲で生産された中細形銅剣や北四国の平形銅剣などに用いられた原料を合わせるならば、4期前半における青銅原料の輸入総量は3期後半の十数倍におよんだと推量される。3期後半のような漢王朝からの政治的賜与はないが、楽浪郡を通じた交易はいっそう活発になったのであろう。

漢鏡や中広形銅矛が北部九州から東方に拡大する一方、中四国における突線鈕1式銅鐸の分布は逆に希薄となる。山陰では石見の中野仮屋銅鐸を最後に完形の銅鐸が消失し、備中・備前・讃岐では次の突線鈕2式銅鐸を最後に銅鐸が衰退していった。大型墳丘墓の出現にみるような首長権の伸長と自立がその背景にあるのだろう。

三遠式銅鐸の源流となる東海派銅鐸は、北摂津の茨木市東奈良遺跡で制作された三対耳四区袈裟文銅鐸を継承し、当初は近畿に分布するものの、まもなく飛騨・尾張・三河に分布が広がっていった〔清水2023〕。尾張の清須市朝日遺跡で発掘された東海派の突線鈕1式銅鐸は、上述のように弥生中期末・後期初頭の埋納であり、その制作年代は朝日遺跡99Ab区SK01や弥生後期前葉の名古屋市高蔵遺跡SK44から出土した4期前半の雲気禽獣紋鏡とほぼ同時期に位置づけられる〔岡村2024a〕。銅鐸と漢鏡とが連動して西から伝来したのであろう。

(3) 4期後半鏡と突線鈕2式銅鐸

4期前半鏡の分布していた中四国の大部分は、一転して漢鏡の空白地帯になる。それにともなって北部九州の銅矛は山陰や瀬戸内から撤退し、出雲の中細形銅剣と北四国の平形銅剣が生産を取り止める。北部九州を仲介とする青銅原料の東方交易が大きく後退したのである。

第2節にみたように、王莽宮廷鏡をふくむ径22cm以上の大型鏡は備前から遠江までの範囲に分布し、画一的な領域a原料を用いた突線鈕2式銅鐸も、それに近い拡がりを見せる。

まず近畿中枢部からみると、②「尚方御」鏡の出土した紫金山古墳は、淀川北岸に位置している。突線鈕2式銅鐸は大阪市長柄・高槻市天神山・川西市満願寺から完形鐸、豊中市の利倉遺跡と利倉南遺跡から突線鈕2～3式銅鐸の破片が出土し、近畿中枢部のなかでも摂津に出土が偏っている。近畿式銅鐸の制作地は不明だが、現状の分布からみれば、その領域a原料と宮廷鏡は王莽から摂津の首長に賜与された可能性が高い。

紫金山古墳の南東約5kmには弥生中期における銅鐸生産の拠点のひとつであった東奈良遺跡が位置し、そのSD1からは4期後半の破鏡も出土している。ここから淀川・木津川をさかのぼった山城南部には径27.8cmという大型の④鏡が出土した木津川市椿井大塚山古墳があり、さらに伊賀・伊勢へと通じている。椿井大塚山は全長175mの前方後円墳で、竪穴式石室から三角縁神獣鏡32面など36面以上の鏡が出土した。また、淀川から瀬田川をさかのぼると近江であり、伊吹山地・鈴鹿山脈の東には濃尾平野が広がっている。弥生後期はじめの瑞龍寺山山頂墓から出土した⑦鏡と美濃観音寺山古墳出土の⑧「王氏昭」鏡は、摂津の首長から近江経由ルートで領域a原料とともにもたらされた可能性が高い。ただし、突線鈕1式銅鐸は飛騨・尾張・三河に分布し、美濃には突線鈕1～4式銅鐸が欠落している。おそらく美濃には突線鈕1式～三遠式銅鐸が存在したものの、後述のように、それを使用していた集団が漢鏡6期前半に近江の大岩山にて挙行された銅鐸儀礼に参列し、そこに自分たちの銅鐸を埋納したからだろう。

東奈良にひとつの淵源をもつ東海派銅鐸は4期前半に東方に転移し、4期後半には領域a原料を用いた突線鈕2式の三遠式銅鐸を成立させる。その制作地は不明だが、近江の大岩山から2個出土しているほか、東海派銅鐸の分布していた尾張・三河を飛びこえて遠江の浜松市船渡・同前原Ⅷ・掛川市長谷から出土している。また、浜松市才四郎谷と松東3次調査区からは突線鈕2式の近畿式銅鐸(片)が出土している。“聞く銅鐸”の分布圏外であった遠江に突線鈕2式の近畿式・三遠式銅

鐸が突如として出現したのである。しかも、破片をふくめると5個も出土している。とくに突線鈕2～5式の近畿式銅鐸が伊勢から渥美半島・浜名湖周辺に点在しているため、それらは伊勢湾を横断するルートで三河・遠江に運ばれたと考えられている〔鈴木2014〕。注目すべきは、伊勢の津市高茶屋から突線鈕2式の近畿式銅鐸、明和町斎宮付近から⑥「尚方作」方格規矩四神鏡、遠江の磐田市松林山古墳から⑨内行花紋鏡が出土していることである。松林山は全長107mの前方後円墳で、遠江で最大級の規模をもち、竪穴式石室から⑨鏡にともなって三角縁神獸鏡や仿製鏡が出土している。4期後半の玉莽鏡と突線鈕2式の近畿式銅鐸とが、②→④→⑥→⑨鏡という摂津から山城・(伊賀・)伊勢を経由する伊勢湾横断ルートによって遠江まで拡がっていった可能性が高く、なんらかの政治的な動きと推測できる。

次に銅鐸分布圏の西縁をみると、出雲・伯耆・因幡・備後では扁平鈕式新段階、備中と讃岐では突線鈕2式、備前では突線鈕3式を最後に銅鐸が消失している。山陰・瀬戸内から武器形青銅器が消失し、銅鐸が東海地方へと拡大していったのにもない、銅鐸分布圏が西から段階的に縮小していったのである。それにともなって漢鏡の流入にも変化があらわれている。

備中では高梁川流域の倉敷市真備町妹と足守川流域の岡山市高塚遺跡フロヤ調査区から“迷路派流水文”の突線鈕2式銅鐸(高塚銅鐸)、高塚遺跡角田調査区から突線鈕2～3式銅鐸の身部片が出土している。妹銅鐸の鉛同位体比は領域A-B間に位置し〔井上ほか2002〕、高塚銅鐸のそれは領域aに属す近畿式銅鐸である。この高塚銅鐸について報告者は埋納坑内の土器や「周辺の遺構の年代観から判断して」〔平井編2000:129頁〕、弥生後期はじめごろに铸造され、「あまり時を経ずに埋納された」〔同1015頁〕と考えている。これが備中最後の銅鐸である。ここから3.5kmほど下流にある弥生後期後半の楯築墳丘墓は、全長80mあまりに復元される双方中円形の墳丘をもち、主体部の木棺から大量の朱が出土した。楯築から3.5kmほど東にある岡山市矢藤治山墓は、全長35mほどの前方後円形墳丘墓で、4期後半の方格規矩四神鏡Ⅲ式(径16.4cm)が破砕副葬されていた。高塚遺跡から出土した25枚の貨泉と同じころ独自の交易によって鏡を入手し、古墳出現期まで伝世したのであろう。備中では5期の破鏡が津寺4号墳と刑部37号住居址から出土しているが、5期の完形鏡は発見されていない。高塚銅鐸の埋納後、近畿中枢部との関係が薄れ、楯築墳丘墓に示されるような独自性を強めていくのだろう。

讃岐では、善通寺市善通寺五重塔下より突線鈕2式の近畿式銅鐸が出土したと伝えられる。おそらくこれを最後に讃岐と近畿とは銅鐸祭祀を共有することがなくなり、地元で生産された平形銅剣も衰退していった。高松市鶴尾神社4号墓は全長40mほどの前方後円形積石墓で、出土した4期後半の「漢有善銅」方格規矩四神鏡Ⅲ式(径18.2cm)はいちじるしく手ずれしている上に、割れた鏡を紐で綴じ合わせて用いていた伝世鏡である〔梅原1933〕。矢藤治山鏡と同じころ独自の交易によって入手し、古墳出現期まで長く伝世したのであろう。その後、5期後半の破鏡が集落遺跡から出土しているが、備中と同じように5期の完形鏡は発見されていない。

これに対して備前では、吉井川東岸の瀬戸内市花光寺山古墳から4期後半の①内行花紋鏡(径24.5cm)が出土している。花光寺山は全長96mほどの前方後円墳で、後円部の組合せ式長持形石棺に付属する側室に①鏡や三角縁神獸鏡などが副葬されていた。吉井川を挟んで西岸の岡山市草ヶ部からは突線鈕1式銅鐸が出土し、花光寺山から南に5kmほど下った同市邑久町からは突線鈕2式の近畿式銅鐸の鈕が採集されている。また、吉井川をさかのぼった和気町和気からも江戸末期に同

型式の銅鐸が出土している。①鏡はこれら近畿式銅鐸にともなって近畿中枢部からもたらされた可能性が高い。備前ではその後も旭川流域の岡山市湯迫車塚古墳から5期後半の内行花紋鏡が三角縁神獸鏡11面にともなって出土しているが、銅鐸は玉野市沖海底から採集された突線鈕3式銅鐸の身部片を最後に消失している。

播磨では扁平鈕式銅鐸の石製鑄型が出土し、銅鐸生産の一翼を担っていたが、突線鈕1～3式銅鐸は衰退する。4期後半鏡は加古川流域の小野市敷地大塚古墳から方格規矩四神鏡Ⅲ式(径15.3cm)、西脇市滝ノ上20号墳から内行花紋鏡(15.1cm)が出土している。どちらも紋様の摩滅した伝世鏡であり、矢藤治山鏡や鶴尾神社鏡と同じように独自の交易によって北部九州から入手したものであろう。播磨は近畿中枢部に隣接するが、漢鏡と銅鐸からみると、近畿中枢部との政治的なつながりは備前よりも希薄であったと考えられる。

以上のように、王莽から領域a原料が大量にもたらされたことにより近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が生みだされ、近畿中枢部は近畿式銅鐸と領域a原料と4期後半鏡を分配することによって新しい地域社会の構築を進めていった。②「尚方御」鏡と突線鈕2式銅鐸の分布、東海派銅鐸と三遠式銅鐸の成り立ちからみて、その中心となったのは北摂津の首長であった。その矛先は主に東方に向けられ、美濃には⑦鏡と⑧「王氏昭」鏡、山城・伊勢・遠江には④・⑥・⑨鏡と近畿式銅鐸が分配された。反対に西方では、それぞれの地域が自立の動きをみせはじめ、近畿中枢部からは①鏡を備前に、近畿式銅鐸を備前と備中に分配するにとどまった。要するに、扁平鈕式銅鐸の段階まで近畿中枢部は新しい文化を吸収するため西方にベクトルが向いていたが、突線鈕1～2式銅鐸の段階に180°方向を転換し、主に東方に展開していくことになったのである。このときに形成された漢鏡と銅鐸の分布圏は、銅鐸が終焉する6期前半までほとんどそのまま100年ほど維持される。つまり、それは漢鏡と青銅原料と銅鐸の授受でつながった政治体制であり、銅鐸祭祀を共有することで成り立った共同体であったと考えられる。

(4) 5期前半鏡と突線鈕3式銅鐸

5期前半鏡は糸島市平原1号墓から大量に出土している。前稿に論じたように、ちょうど建武中元二年(57)春正月に「東夷の倭奴国王、遣使奉獻す」(『後漢書』光武帝紀)という時期にあたり、後漢王朝と北部九州との政治的な交渉が裏づけられる。

中四国以東に流入した5期前半鏡は少ないが、天理市大和天神山古墳から方格規矩四神鏡6面がまとまって出土している。大和天神山は全長113mの前方後円墳で、1・8・9号鏡がⅣB式、16・19号鏡がⅤA式、21号鏡は型式不明であり、鉛同位体比は8号鏡が領域A-B間、21号鏡が領域B、それ以外の4面は領域Aに属している⁽⁷⁾。近畿中枢部の中心が北摂津から奈良盆地東南部に移動した可能性が高い。

突線鈕3式銅鐸は数が増加している。とくに三遠式銅鐸は三河・遠江に集中するほか、北には信濃の塩尻市柴宮から突線鈕3式の完形鐸、松本市宮淵本村から突線鈕2～3式の鈕の破片、西には尾張・伊勢・近江・丹後へと分布を広げている。また、丹後の舞鶴市下安久と遠江の浜松市滝峯七曲りでは、突線鈕3式の近畿式銅鐸と三遠式銅鐸とが共存している。

(5) 5期後半鏡と突線鈕4・5式銅鐸

三遠式銅鐸は突線鈕3式を最後に生産が終了する〔難波2011〕。4期後半に入手した領域a原料の枯渇が原因であろう。丹後に突線鈕3式の三遠式銅鐸が運ばれたのは、日本海ルートで大陸から原料を直接輸入しようとした働きかけたからかもしれない。その甲斐なく、突線鈕4・5式銅鐸はすべて近畿式となる。その近畿式銅鐸は、大局的に分布をみると、出現から半世紀たって分布圏の西端が備中から播磨に縮小する程度の変化にすぎない。

しかし、漢鏡と銅鐸の分布を重ね合わせると、近畿中枢部で王権が形成されてゆくプロセスが明瞭に浮かびあがってくる。さきに漢鏡との相対編年を突線鈕4式銅鐸≡漢鏡5期後半、突線鈕5式銅鐸≡漢鏡6期前半としたが、突線鈕4式と5式それぞれの出土数が少ないため、図3では5期後半鏡と突線鈕4・5式銅鐸とを重ね合わせてみた。

まず、5期後半鏡は北部九州と近畿との二極化が再発現する。北部九州では糸島～福岡平野よりも周辺地域からの出土が多い。唐津市中原墳丘墓では5期後半鏡4面が破碎副葬され、惣座0式期のST13414墓に内行花紋鏡1面、惣座1式期のST13415墓の中心主体から内行花紋鏡2面、周溝内埋葬から方格規矩四神鏡1面が出土している。惣座0式は下大隈式新段階～西新町式(≡庄内式)古段階に、惣座1式は西新町式古段階にそれぞれ併行する〔蒲原2003〕。伊万里市午戻SC010箱式石棺墓や鳥栖市藤木SC201石蓋土坑墓の内行花紋鏡も破碎副葬である。遠賀川上中流域の嘉穂盆地では香春町宮原3号箱式石棺墓に2面、田川市伊加利・嘉麻市笹原の箱式石棺墓に1面ずつ内行花紋鏡が副葬され、鏡の状態からみて、これらは完形のまま副葬された可能性が高い。漢鏡分布のドーナツ化現象が進み、以後、北部九州には突出した中心があらわれなくなる。

これに対して近畿中枢部では、奈良盆地東南部の大和天神山古墳に4面、桜井茶白山古墳に6面以上、大和郡山市小泉大塚古墳に3面以上の内行花紋鏡が副葬されていた。桜井茶白山は全長207m、大和天神山は全長105m、小泉大塚は全長88mの前方後円墳であり、桜井茶白山は竪穴式石室の再調査によって4期後半～7期の漢鏡56面以上、三角縁神獸鏡26面以上、仿製鏡21面以上の出土が確認されている〔岡林編2024〕。大和に漢鏡を大量に集積する王権が誕生し、古墳時代の倭王権に継承されていることから、これを原倭王権と呼ぶことにする。

原倭王権は漢鏡を集積する一方、鏡の一部と近畿式銅鐸を各地に分配した。近畿中枢部の一角を占める西摂津には、得能山・会下山二本松・阿保親王塚・池田山古墳から内行花紋鏡が1面ずつ出土している。会下山二本松と池田山は全長55～81mの前方後円墳であり、阿保親王塚と池田山には三角縁神獸鏡がともなっている。猪名川西岸の川西市栄根から出土した銅鐸は突線鈕5式であり、5期後半～6期前半に分配されたものだろう。

紀伊にはかねてより多くの銅鐸がもたらされ、突線鈕4・5式銅鐸も計9個を数える。有田川北岸に位置する有田市円満寺の内行花紋鏡2面は、大和以外では唯一の複数面出土であり、これらの銅鐸と連動してもたらされた可能性が高い。これに対して播磨と備前は、やや複雑である。備前には4期後半の①鏡につづいて5期後半には岡山市湯迫車塚古墳の内行花紋鏡がもたらされている。湯迫車塚は全長48mの前方後方墳で、竪穴式石室から内行花紋鏡のほか7期鏡や三角縁神獸鏡11面が出土した。これが原倭王権から分配された5期後半鏡の西端である。備前に隣接する西播磨では、たつの市吉島古墳から同時期の内行花紋鏡や三角縁神獸鏡など6面の鏡が出土している。古墳は中国山地への入口に立地する全長30mの前方後円墳で、ここから揖保川をさかのぼった山

間部には少なくとも3個の突線鈕4式銅鐸が出土している。播磨から出土する完形の突線鈕式銅鐸はほかに例がなく、佐用町下本郷例が銅鐸分布圏の西限であり、この時期に原倭王権から漢鏡と銅鐸とが相前後して政治的に分配された可能性が高い。

丹後では野田川上流域の与謝野町蛭子山1号墳から5期後半鏡が出土し、近くの比丘尼城では高さ107cmの突線鈕5式銅鐸と破損銅鐸の2個が江戸時代に出土している。また、但馬の豊岡市久田谷では突線鈕5式銅鐸が人為的に破砕された状態で出土し、そこから円山川をさかのぼった朝来市向山2号墳では5期後半鏡が破砕副葬されていた。丹後山地の東西に同時期の漢鏡と銅鐸がもたらされたのだが、東西で対照的な出土状況を示している。

次に、東方に目を転じると、4期後半の④→⑥→⑨鏡という山城→(伊賀→)伊勢→遠江ルート上に木津川市椿井大塚山古墳・伊賀市石山古墳・松阪市清生茶白山古墳・磐田市豊田町広野出土の5期後半鏡、伊賀の伊賀市湯舟・西馬場C・千歳、伊勢の鈴鹿市一反通・伊勢市桶子、渥美半島の田原市椏・堀山田、遠江の湖西市白須賀・浜松市分寸・猪久保に破片をふくむ突線鈕4・5式銅鐸が密に点在している。前稿に論じたように、5期後半鏡はさらに相模の横浜市日吉観音松古墳や甲斐の甲府市中道銚子塚古墳へと波及している。それに関連して駿河湾東沿岸の沼津市藤井原遺跡と伊豆の国市田京段遺跡から近畿式銅鐸の飾耳を加工した垂飾品が出土し、伝伊豆市益山寺の突線鈕5式銅鐸は出土の所伝に疑問があるが(梅原1927:177-180頁)、東奈良遺跡出土例に類似するガラス勾玉鎔范が沼津市植出北II遺跡から出土し(大谷2022/清水2023)、原倭王権と駿河・伊豆との間で多様な交流があったことがうかがえる。

突線鈕3式の三遠式銅鐸が近江・丹後に波及し、濃尾平野は三遠式銅鐸の分布圏内に位置するにもかかわらず、突線鈕式銅鐸の分布密度は希薄である。とくに、美濃には4期後半の⑦・⑧鏡以来、連綿と漢鏡がもたらされているのに、突線鈕1式～三遠式銅鐸はまったく出土していない。ところが、可児市久々利の突線鈕5式銅鐸が木曾川南岸に突如として貫入⁽⁸⁾、大垣市荒尾南遺跡と清須市朝日遺跡では突線鈕3～5式銅鐸の飾耳片が出土している。久々利の北には6期前半鏡の出土した可児市身隠御嶽古墳、木曾川北岸には5期後半鏡の出土した美濃加茂市太田大塚古墳があり、漢鏡と銅鐸がほぼ同じころに流入した可能性が高い。

近江では野洲市大岩山の3地点から計24個の突線鈕式銅鐸が出土している(表6・図4)。型式別にみると、突線鈕1式は4個、突線鈕2～3式は近畿式13個と三遠式4個、突線鈕5式は1個、型式不明は2個である。近畿式の数は一遠式の3.5倍あり、突線鈕3式の数をもっとも多い。第I地点から出土した突線鈕1～3式には突線鈕5式がともない、銅鐸の最末期まで使用されたことがわかる。制作時期も流派も異なる銅鐸で構成されているため(佐原1974)、社会統合によって多数の銅鐸が集められたと考えられている(小林1967:232-235頁)。とくに、三遠式は長期にわたって揺り鳴らされた古式鐸ほど内面突帯の摩滅がいちじるしく、“大福型”や近畿式銅鐸にはそのような摩滅が観察できないため(難波2011)、地元の集団が近畿式と三遠式とを使い分けていたのではなく、銅鐸の使用法ひいては伝統を異にする複数の集団が大岩山に結集し、共同で埋納儀礼を執りおこなった可能性が高い。しかも、大岩山をのぞけば地元の近江から突線鈕式銅鐸の確かな出土例が少なく、隣接する美濃から突線鈕1式・三遠式銅鐸が出土していないことからみれば、近江と美濃の集団がそれぞれの銅鐸を大岩山に持ち寄って埋納したことがひとつの可能性として考えうる。さらに、大岩山第I地点から最末期にして最大の突線鈕5式銅鐸(高さ134.7cm、重さ45.47kg)が出土していること、

表6 滋賀県野洲市大岩山出土銅鐸型式別一覧

地点	型式	突線鈕					不明	計
		1	2	3	4	5		
第Ⅰ地点 (1881)	近畿式	1	2	7		1	2	14
	三遠式		1					
第Ⅱ地点 (1962)	近畿式	2	1	3				9
	三遠式		1	2				
第Ⅲ地点	(近畿式)	1						1



図4 滋賀県大岩山出土銅鐸
(複製品をふくむ)〔鈴木・進藤編 2021: 図1〕

この埋納をもって銅鐸祭祀が終焉を迎えたいこと、4期後半以来、近畿式銅鐸が伊勢湾横断ルートで三河・遠江にもたらされていたなかで、濃尾平野の東北隅に突如として突線鈕5式の久々利銅鐸が貫入するなど、美濃に対する原倭王権の介入が強まったと想定されることからみれば、少なくとも大岩山第Ⅰ地点における計14個の銅鐸埋納は、その突線鈕5式銅鐸を祭器とする原倭王権が盟主となって新たな社会統合を誓う結盟儀礼が執りおこなわれたと推測される。すなわち、原倭王権の主導のもと、近畿・東海連合というべき広域の政治体制が誕生したことによって銅鐸は終焉に向かったと考えられる。

徳島市矢野遺跡で発掘された突線鈕5式銅鐸の埋納坑は弥生後期後半〔近藤編 2001〕、奈良県桜井市の大福遺跡と脇本遺跡から出土した銅鐸片は弥生後期後半～庄内式初期〔光石編 2011〕、遠江の浜松市松東遺跡 SK06 や同市梶子遺跡 A4 区土坑 2 から出土した銅鐸片は西遠江の山中式後期とされ〔鈴木 2014〕、銅鐸の終焉は東西とも弥生末期にあったと考えられる。

(6) 6期前半鏡

後漢の明帝・章帝期に淮南の「尚方」工房から腕利きの鏡工が陸続と自立し、浮彫表現の盤龍鏡・獣帯鏡を創作していった。その流れを受けて呉派は80年代に陰陽二神の画像鏡を創作し、90年代には淮派が画像鏡を受容する。一方、黄河流域では作鏡活動が衰え、内行花紋鏡の雲雷紋帯が凹帯に、鈕座の四葉紋が蝙蝠紋に変化する。

日本出土の6期前半鏡は5期後半鏡の約3分の2に減少する。分布は依然として北部九州と近畿に集中するが、とくに丹後・丹波・山城・近江と瀬戸内沿岸部に点在していることに注意される。

丹後の与謝野町大風呂に所在する岩滝丸山古墳は、径30mの円墳である。箱式石棺から出土した「田生作」画像鏡は、径21.3cm、西王母・東王公・龍・車馬を主紋とし、外区に唐草状の尻尾をもつ獣紋を配している(図5左)。漢鏡7期の「田氏作」画像鏡は福岡県潜塚古墳や兵庫県西求女塚古墳などから出土しているが、それとは別に「田生作」や「田萌作」など作鏡者の姓名を明示した6期前半の優品がごくわずかに出現している。開明堂所蔵の「田生作」画像鏡は、径24.5cm、重さ1581g、西王母・龍・虎・車馬を主紋とする(図5右)。その主紋や外区の九尾狐・三足鳥などの表現は淮派の永元三年(91)「石氏作」鏡や「呂氏作」鏡に近似するが、呉派の画像鏡表現を模倣しつつ、両性を具有した西王母を単独であらわした特異な作例であり〔岡村2012〕、およそ90年ごろに位置づけられる。岩滝丸山鏡は、西王母と東王公の陰陽二神に分裂し、外区の獣紋がやや形式化していることから、開明堂鏡より後出するものの、車馬や宙返りする龍の形は酷似し、90年代に同じ「田生」工房で制作されたとみてまちがいないだろう。

岩滝丸山古墳から100mほど西に大風呂南1号墓がある。それは27×18mほどの長方形墳丘墓で、中心主体の舟底状木棺内から鉄剣11本など多数の鉄器、銅釧13点、ガラス釧や勾玉・管玉など各種の玉類が出土した〔肥後2016〕。墓坑内の土器は弥生後期後半とされる。ガラス釧はカリガラス製の輸入品で、棺内に散布された水銀朱も鉛同位体比分析と硫黄同位体比分析によって大陸産(貴州省銅仁もしくは湖南省辰溪)と推定されている〔南ほか2013〕。弥生後期後半には出雲の西谷3号墓や備中の楯築墳丘墓など西日本各地に大型墳丘墓が出現するが、いずれも鏡の副葬がみられない。それは6期前半鏡が輸入されていなかったからではなく、宝器として伝世されたからであろう。大風呂南1号墓と岩滝丸山古墳とは、造営年代こそ異なるものの、同一集団の首長墓と考えられ、岩滝丸山の「田生作」鏡は大風呂南のガラス釧や水銀朱などと同じころに舶載された可能性が高い。

ここから野田川を8kmほどさかのぼった加悦谷に5期後半鏡の出土した蛭子山1号墳や突線鈕



図5「田生作」画像鏡 左：京都府岩滝丸山古墳出土〔高橋編1987：65〕、右：開明堂所蔵〔西村編1994：44〕

5式銅鐸の出土した比丘尼城があり、南東20kmほどの舞鶴湾東岸には突線鈕3式の近畿式と三遠式銅鐸が共存した舞鶴市下安久がある。銅鐸文化圏の一角として原倭王権や東海地方とも交流があったことがわかる。また、6期前半鏡は丹波の南丹市黒田古墳・園部垣内古墳・今林6号墳、山城の長岡京市長法寺南原古墳・向日市寺戸大塚古墳から出土している。園部垣内は全長82mの前方後円墳で、三角縁神（仏）獣鏡3面にともなって「□氏作」盤龍鏡が出土し、長法寺南原は全長62mの前方後方墳で、三角縁神獣鏡4面にともなって「青盖作」盤龍鏡と内行花紋鏡の6期前半鏡2面が出土している（図6）。複数の6期前半鏡が共存する唯一の例である。寺戸大塚は全長98mの前方後円墳で、80年代に淮派の制作した浮彫式獣帯鏡が三角縁神獣鏡や仿製鏡とともに前方部の竪穴式石室から出土している。注意すべきは、これら桂川流域では6期前半に突如として漢鏡が出現することである。それはこの時期に原倭王権が丹後への交通路を確保しようとしたことを暗示している。また、これら漢鏡が古墳時代の倭王権から分配されたとすれば、数にまさる5期後半鏡が主になっていたはずである。桂川流域の古墳出土6世紀前半鏡が伝世鏡であることは、その時空間を考えることによっても検証できるのである。

中四国でも5期後半まで完形鏡の出土が希薄であったが、出雲や吉備に大型墳丘墓の出現する6期前半の鏡は山陰と瀬戸内の古墳から10面ほど出土している。80～90年代に制作された淮派の盤龍鏡に、伯耆の湯梨浜町北山1号墳の「尚方作」鏡、美作の鏡野町赤峪古墳の「青盖作」鏡、備中の総社市宿寺山古墳の「黄羊作」鏡、備後の三原市みたち5号墳の「青羊作」鏡があり、いずれも古墳時代前期に下る前方後円墳からの出土である。「黄羊（祥）」と「青羊（祥）」は「青盖（祥）」工房から90年代に分立した系列工房である（岡村2012）。しかも、これら中四国から出土した6期前半鏡は、高松市石清尾山猫塚古墳の内行花紋鏡をのぞけば、すべて三角縁神獣鏡をともっていない。出土古墳の大部分は銅鐸文化圏外に位置し、地域ごとの自立性が高まっていたことを考えると、それらの漢鏡は原倭王権から分配されたのではなく、弥生時代のうちに独自の交易で入手し、古墳時代まで伝世したのであろう。



図6 京都府長法寺南原古墳出土鏡 左：「青盖作」盤龍鏡、右：内行花紋鏡〔水野・山田編 2005：V・II-13〕

原倭王権の誕生した大和では6期前半に鏡が激減する。それでも広陵町黒石5号墳から出土した「袁氏作」画像鏡は、径20.8cm、岩滝丸山「田生作」鏡に比肩しうる優品である。黒石5号墳は全長50mの前方後方墳で、近傍の新山古墳からは三角縁神獣鏡をふくむ30面以上の鏡が出土している。また、摂津の尼崎市池田山古墳から出土した6期前半の画像鏡も、大破しているが、径19.4cmに復元され、5期後半鏡や7期の鏡がともない、継続的に漢鏡を入手していたことがわかる。

6期前半鏡の制作年代は1世紀第4四半期～2世紀はじめである。それらが制作からほどなくして日本列島にもたらされたとすれば、ちょうど倭国王帥升の活動期にあたっているため、107年の朝貢に際して安帝から回賜として与えられ、帥升から各地の首長に再分配された可能性がないわけではない。しかし、内行花紋鏡など中原で制作された鏡はともかく、岩滝丸山の「田生作」画像鏡や黒石5号墳の「袁氏作」画像鏡、長法寺南原や赤峪の「青盖作」盤龍鏡など6期前半鏡の多くは淮河下流域の民間工房で制作され、みやこ洛陽から淮派の鏡はほとんど出土していないが、楽浪郡域から多数出土しているため、安帝からの下賜品というよりも、楽浪郡の市場を経由する交易によって入手された可能性が高い。5期後半～6期前半に近畿・東海連合を成立させた原倭王権は、次なる戦略として後漢王朝や諸韓国との通交を企図し、日本海ルートの拠点である丹後との連帯を強化したのであろう。ちょうど大風呂南墳丘墓の時期であり、その首長が原倭王権の対外交渉を先導していたと考えられる。他方、瀬戸内ルートの要衝である吉備や讃岐の首長と原倭王権との関係については、十分な手がかりがないのが現状である。

5 倭国王帥升の朝貢

倭奴国王の冊封からちょうど半世紀をへた107年、『後漢書』安帝紀に「冬十月、倭国遣使奉献す」とあり、同東夷列伝に「安帝永初元年、倭国王帥升等 生口百六十人を献じ、請見を願う」という。その2年前には高句麗が遼東郡の6県に侵入し（同高句麗伝）、前年には鮮卑が漁陽郡（いまの北京市）に侵入して太守張頭が戦死しており（同遼東帝紀）、辺境の騒乱相次ぐ「永初多難」（同東夷列伝）のなか（川勝2008：58-69頁）、倭国王は160人もの生口を連れて遣使したのである。239年に倭王卑弥呼が魏に遣使したときの生口は10人、248年の台与の朝貢では30人であるから、一桁ちがう規模である。

この「倭国」について古本『後漢書』には「倭面土国」や「倭面国」とあって「ヤマト国」と読む内藤湖南説、『翰苑』所引『後漢書』や『日本書紀纂疏』には「倭面上国」とあって「倭回土国」の誤り、すなわち倭の伊都国とみる白鳥庫吉説などが提起されていたが、西嶋定生は浩瀚な文献考証をおこない、現行本『後漢書』の「倭国」や「倭国王」を是とした（西嶋1999：43-114頁）。そのうえで57年に朝貢した「倭奴国王」は「倭人の国々のなかの一国であった奴国」であったのに対して、このときの「倭国」は倭人の諸国を包含する「広域的政治組織としての名称」であり（同17頁）、「倭国王帥升等」を「帥升ら」と複数に読んで帥升を主とする諸国連合とみなし、「倭国王」への「服属のあかし」として諸国から160人もの多数の生口が集められたと推測している⁽⁹⁾（同20-25頁）。さらに『魏志』倭人伝には「その国（=倭国）もとまた男子をもって王となし、とどまること七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王となす、名づけて卑弥呼と曰う」とあり、2世紀末の「倭国乱」より70～80年前にさかのぼる「倭国王帥升」を初代王として想定していることから、

このときはじめて「倭国」という名称が使用されたのは、この永初元年すなわち紀元 107 年に近いころに、初めて「倭国」が形成されたためであり、そして永初元年の遣使奉獻はこの新しく「倭国」が誕生したことを中国王朝に知らせ、その承認を得るための儀礼行為であった、と考えられるのではあるまいか。

と結論づける〔同 32 頁〕。少なくともそれは倭人伝を執筆した陳寿の認識であり、それが実態を正しく反映しているかどうかは別として、論理として一貫している。

西嶋はさらに、糸島平野の三雲南小路・井原鍵溝・平原 1 号墓に多数の漢鏡が副葬されていることから、「帥升は伊都国をその都とするものであった」〔同 33 頁〕と推測している。また、倭人伝には伊都国について「世よ王あり、皆な女王国に統属す」という一文があり、「伊都国には代々、王がいて、それらはすべて女王国に統属していたことが示されている」〔同 29 頁〕。このため、白石太一郎も「倭国」は「せいぜい北部九州のいくつかの小国の連合であった」〔2009:57 頁／2013:59-66 頁〕と論じている⁽¹⁰⁾。

もっとも『翰苑』残巻に引く『魏略』には対馬・一支・末廬・伊都国の順に大官・副官や風俗などを記した後に「其の国王は皆な女王に属する」とあり、北部九州では国ごとに王がいたと解釈される〔橋本 1997: 165-179 頁〕。『後漢書』東夷列伝にも「武帝、朝鮮を滅ぼしてより、使駅、漢に通じる者、三十許国なり、国ぐに皆な王を称し、世世統を伝う。其の大倭王は邪馬台国に居る」とあり、30 ばかりの国々がみな王を称していたとするから、范曄は『魏志』ではなく『魏略』に拠って作文したことがうかがえる。また、『魏略』には『魏志』の「世有王」や『後漢書』の「世世伝統」にあたる語がなく、西嶋定生〔1999: 41 頁 (12)〕は『魏略』の「其国王皆属王女也」の「其国」を伊都国に限定して「伊都国の王は皆な女王に属す」と解釈するが、これはやや説得力に乏しい。西晋時代に編纂された魚豢の『魏略』と陳寿の『魏志』と王沈の『魏書』それぞれの典拠および前後関係について書誌学的な検討が必要であり〔山尾 1986: 35-79 頁〕、史書の片言隻句をもって「倭国」の実態を明らかにするのはむずかしい。

さきにみたように、倭国王帥升の朝貢は漢鏡 6 期前半にあたり、三雲南小路・井原鍵溝・平原 1 号墓から出土した鏡はそれより 50 年以上前の制作である。「倭国」をめぐる議論にそれらを俎上に載せるのは妥当ではない。むしろ、1 世紀第 3 四半期から 2 世紀はじめに制作された 5 期後半～6 期前半鏡を検討するべきであろう。

北部九州において、5 期後半鏡は糸島～福岡平野よりもその周辺地域に多く、6 期前半鏡は遠賀川流域とそれ以東に多く分布している。王墓といえるような大墓は発見されていない。また、福岡市仲島遺跡の第 5 次調査で出土した 6 期前半の内行花紋鏡は、径 11.3cm、「弥生時代後期の河川際で行われた祭祀行為」により完形のまま「土器とともに投棄された」〔池田ほか 2018〕という。それまで鏡はもっぱら墓に副葬されたが、自然神の祭祀に用いられたとすれば、福岡平野では 6 期前半に鏡の役割が変質してきたことがうかがわれる。

これに対して東方では、多数の 5 期後半鏡が近畿中枢部、とりわけ大和に集中し、西は備前、南は紀伊、北は丹後、東は甲斐・相模に分布が広がっている。5 期後半～6 期前半に制作された突線鈕 4・5 式の近畿式銅鐸も、西は播磨、南は紀伊・土佐、北は丹後、東は遠江におよんでいる。漢鏡と銅鐸は由来も性格もまったく異なる 2 種の青銅器であるが、それらを分配する体制は 4 期後半にさかのぼる。すなわち、近畿中枢部は王莽から下賜された大量の青銅原料を元手に近畿式銅鐸

を創出し、原料の一部を東海派の銅鐸工人に分与して三遠式銅鐸の創作に協力した。分配された王莽鏡の西限は備前、銅鐸の西限は備中であり、東限はどちらも遠江である。それは漢鏡と銅鐸の授受でつながった中央と地方との体制であり、銅鐸祭祀を共有することで成り立った共同体であった。5期前半に体制の中樞が摂津から大和に移動し、5期後半には多数の漢鏡を集積した原倭王権が成立する。三遠式銅鐸の生産は5期前半の突線鈕3式をもって終了するが、銅鐸祭祀はそのまま継続され、6期前半まで近畿式と三遠式とが並立する体制が維持されていた。その最末期に近江の大岩山にて最大の突線鈕5式の近畿式銅鐸を中心に、近畿式・三遠式の双方をふくむ突線鈕1～3式銅鐸がいっしょに埋納された。原倭王権の主導のもと近畿と東海の二大勢力が連合する結盟儀礼が執りおこなわれ、広域の連合政権が誕生したことをもって各地の銅鐸も終焉を迎えたと推測される。銅鐸文化圏の一角を占めていた丹後は、ちょうど大風呂南墳丘墓の造営期にあたるが、この連合政権に参画し、日本海を通じた朝鮮半島・大陸との交易に先導的な役割をはたしたのであろう。原倭王権も山城～丹波の桂川流域の集団に6期前半鏡を分配し、丹後への交通路の確保につとめた。

以上のように、倭国王帥升の時代にあたる5期後半～6期前半の北部九州には強力な王権をものがたる状況がみいだせないのに対して、近畿を中心とする東方では、5期後半～6期前半鏡と近畿式銅鐸の分布からみて大和に原倭王権が誕生し、大岩山にて最末期にして最大の近畿式銅鐸をふくむ近畿式・三遠式銅鐸が計24個も埋納されたことから、原倭王権の主導のもと近畿・東海連合政権が成立したと考えられる。すなわち、広域的政治組織としての「倭国」は、北部九州の小国連合ではなく、原倭王権を頂点とする近畿・東海勢力の大連合であり、推測をたくましくすれば、大岩山最大の銅鐸は帥升の制作した「倭国」統合のシンボルであったのではなかろうか。

原倭王権の対外交渉は主に丹後が先導したが、6期前半鏡が吉備と讃岐にも点在すること、銅鐸の終焉と歩調を合わせるように北部九州の広形銅矛が消滅したことからみれば、瀬戸内や北部九州の諸勢力も後れて近畿・東海連合に参画した可能性があるだろう。しかも、歴代の伊都国王は女王国(=邪馬台国)に統属していたという『魏志』倭人伝の記録にしたがうならば、帥升のときに伊都国王は「倭国」の傘下に入ったと解釈できる。今後の検討課題であろう。

倭国王帥升らが生口160人を貢献した後、はたして遣使団は洛陽で安帝に朝見し「倭国王」に冊封されたのか、回賜として何がもたらされたのか、明らかではない。山尾幸久〔1986:30-34頁〕は、安帝紀には「倭国遣使奉献す」とあって「倭国王」になっていないこと、『北史』倭国伝には「漢の光武の時、使いを遣わして入朝せしむ。自ら大夫と称す。安帝の時また朝貢せしむ。これを倭の奴国と謂う」とあることから、「倭国王」の冊封はなく「倭奴国王」のままであり、印綬も与えられていないと考えている。いささか極論ではあるが、安帝からの回賜にふさわしい文物が日本の考古資料にみいだせないし、殤帝がわずか2歳で崩じて安帝が13歳で即位したばかり、辺境の騒乱相次ぐ「永初多難」という内憂外患のなか、期待したような成果がえられなかった可能性は大きい。これも今後の検討課題である。

以上は中国の暦年代をもとにした歴史考古学の分析であり、土器との相伴関係など埋没時の間接的な証拠を積み上げて組み立てられた先史学の年代観とは、制作年代を採るのか、埋没年代を採るのか、分析の出発点が正反対のため、おのずとちがった結論になった。批正を請う。

注

- (1) 青海湖の東北岸に位置する青海省海北藏族自治州海晏県三角城遺址は、東西 650 × 南北 600m の城郭をもち、城内からは「西海郡虎符石匱、始建国元年十月癸卯、工河南郭戎造」銘の虎符石匱や始建国元年（西暦 9）三月「…前鍾官工良造第八」銘をもつ大泉五十・小泉直一の陶母範片が出土し、西海郡治であったことが裏づけられる〔李・王 1990〕。
- (2) 貨泉の分類はかねてより古銭学によって進められてきたが、洛陽西郊漢墓から出土した 1885 枚の貨泉について報告者は、「貨泉径一寸、重五銖」（『漢書』食貨志下）に符合する径 23mm で重さ 2.12g の“標準錢”と径 20mm 以下で重さ 1.4g 以下との 2 種に分け、前者は貨泉全体の 12.3%、後者は 87% を占めたという〔中国科学院 1963〕。また、蔣若是〔1997〕はその王莽～後漢初期墓の 7 基から出土した 293 枚の貨泉を分析し、洛陽西郊漢墓の報告にいう 2 種は王莽期に铸造され、“光武貨泉”を否定している。すなわち、貨泉の铸造年代は 14 年の始铸から王莽滅亡の 23 年までの間としている。近年、白雲翔〔2020〕は漢長安城未央宮少府遺址や兆倫村鍾官錢遺址などで発掘された径 22～24mm の貨泉を官製の“標準型”、錢径 22mm 未満のものを民間の“私铸貨泉”と分類し、日本出土の貨泉は多くが“標準型”としている。
- (3) 貨泉は 1 枚 1 錢の価値で、同時に発行された貨布は 1 枚 25 錢に相当する。日本出土貨泉は経済交流にともなって流通したものであり、政治的に贈与されたものではない。
- (4) 弥生中期におけるライン D から領域 A への移行は、漢武帝が衛氏朝鮮を滅ぼして楽浪郡など朝鮮四郡を設置したことが契機になったと推測されていたが〔馬淵・平尾 1982〕、近年の中国や韓国における鉛同位体比分析の成果をふまえて中村大介〔2024：112-130 頁〕は、ライン D には朝鮮半島産（ゾーン II・III）のほか華北～遼東産の鉛がふくまれ、ライン D から領域 A へと遷移するのは衛氏朝鮮期（前 195～前 108）と推測している。
- (5) 川西宏幸〔1975〕は方格規矩四神鏡・内行花紋鏡と銅鐸との分布上の関連を分析し、方格規矩四神鏡は外縁付鈕式鐸と、内行花紋鏡は扁平鈕式鐸との相関が強く、同時期に入手したと推論している。漢鏡と銅鐸との関連を分析した先駆的な研究であるが、それぞれの型式分類が大まかで、鉛同位体比からみた相対編年とも合致していない。
- (6) 城山 2 号鐸の鉛同位体比は領域 A と領域 B の中間に位置し、井上洋一ら〔2002〕はライン D と領域 A 原料の混合とみている。
- (7) 大和天神山古墳からは 20 面の鏡が出土し、最初の鉛同位体比分析では鏡相互の汚染が疑われたため、再測定が実施されている〔平尾 2004〕。大賀克彦さんのご教示。
- (8) 濃尾平野ではほかに名古屋市名古屋城濠出土と伝えられる突線鈕 5 式銅鐸があるが、出土の所伝に疑問がある〔梅原 1927：105-106 頁〕。
- (9) 難波洋三〔2012〕は漢代の奴隸（生口）1 人あたりの価格は 1 万 5 千～2 万錢で、青銅原料 50～70kg と等価交換できたとする。帥升の活動域を丹後・近江・山城を要とする北近畿に推定する森岡秀人〔2015〕も、「帥升等の後漢貢献は、大型銅鐸の原料インゴットの大量入手の契機をなしたことも考えられ、生口 160 人は横断するクニグニの総力結集による見返り的な貢物であり、等価的な交換が行われた」と推測する。すなわち、近畿式・三遠式銅鐸に用いられた大量の領域 a 原料は倭国王帥升らの朝貢時に生口 160 人と交換され、北近畿に持ち帰られたとみており、本稿の年代観とは 100 年近い開きがある。しかも、このころ中国では後漢鏡タイプの領域 B 原料が主に流通しており、前漢鏡タイプの領域 A に属す領域 a 原料が市場で大量に入手できたのか、安帝に対する献上品が市場に流れて等価交換に付されることがあったのか、疑問である。第 1 節にみたように、肅慎氏が献上したという「楛矢・石弩」は石鏃を装着した原始的な木矢であり、政治的な価値は高くても経済的な価値はまったくない。近代経済学の見方で古代の儀礼的な朝貢を解釈するのは妥当ではない。
- (10) 帥升の墓について寺澤薫〔2023：140-145 頁〕は甕棺の年代をもとに糸島平野の井原鍵溝に比定する。しかし、江戸時代に発掘された甕棺は現存しないため型式不明であるし、出土した方格規矩四神鏡は漢鏡 4 期であるから、鏡の使用期間を 100 年ほど想定しなければならない。

参考文献（五十音順）

- 赤塚次郎 1992 「瑞龍寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告』第1集
- 池田祐司・大塚紀宣・大森真衣子 2018 「仲島遺跡第5次」『福岡市埋蔵文化財年報（平成29年度版）』32号
- 東 晋次 2003 『王莽一儒家の理想に憑かれた男』白帝社
- 井上洋一・松浦有一郎・平尾良光・早川泰弘・榎本淳子・鈴木浩子 2002 「東京国立博物館所蔵弥生時代青銅器の鉛同位体比」『MUSEUM』第577号
- 梅原末治 1927 『銅鐸の研究』大岡山書店
- 梅原末治 1933 『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告第12冊
- 梅原末治・藤田亮策 1959 『朝鮮古文化綜鑑 第3巻』養徳社
- 大谷宏治 2022 「沼津市植出北Ⅱ遺跡出土ガラス勾玉鎔范をめぐって」『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号
- 岡村孝作編 2024 『桜井茶臼山古墳の研究—再発掘調査と出土遺物再整理』科研費研究成果報告書
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館
- 岡村秀典 2012 「後漢鏡における淮派と吳派」『東方学報』京都第87冊
- 岡村秀典 2019 「王莽鏡論」『東方学報』京都第94冊
- 岡村秀典 2021 「舶載された王莽宮廷鏡—大阪府紫金山古墳出土方格規矩四神鏡の鉛同位体比分析から」『史林』第104巻第5号
- 岡村秀典 2024a 「倭奴国王冊封以前の鏡と青銅器原料」黒川古文化研究所紀要『古文化研究』第23号
- 岡村秀典 2024b 「歴史考古学からみた倭王権の形成」『考古学が解明する邪馬台国の時代』日本考古学協会
- 蒲原宏行 2003 「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第27集（同2019『弥生・古墳時代論叢』六一書房に再録）
- 榎本杜人編 1974 『楽浪漢墓』第1冊（大正十三年度発掘調査報告）楽浪漢墓刊行会
- 榎本杜人・町田章 1974 「漢代紀年銘漆器聚成」（榎本杜人編1974同上所収）
- 川勝 守 2008 『日本国家の形成と東アジア世界』吉川弘文館
- 川西宏幸 1975 「銅鐸の埋蔵と鏡の伝世」『考古学雑誌』第61巻第2号
- 川道 寛・古澤義久編 2016 『原の辻遺跡』総集編Ⅱ『長崎県埋蔵文化財センター調査報告書』第18集
- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号（同1961『古墳時代の研究』青木書店に加筆再録）
- 小林行雄 1967 『女王国の出現』文英堂
- 近藤玲編 2001 『矢野遺跡（Ⅰ）』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第33集
- 佐原 真 1974 「銅鐸の祭り」樋口隆康編『古代史発掘5大陸文化と青銅器』講談社
- 清水邦彦 2023 『銅鐸をつくる—弥生時代の鑄造技術』茨木市立文化財資料館図録
- 蔣 若是 1997 「“莽錢”疏証」『秦漢錢幣研究』中華書局
- 下垣仁志 2016 『日本列島出土鏡集成』同成社
- 白石太一郎 2009 『考古学と古代史のあいだ』ちくま学芸文庫
- 白石太一郎 2013 『日本歴史 私の最終講義 07 古墳からみた倭国の形成と展開』敬文舎
- 鈴木一有 2014 「松東遺跡における銅鐸破片出土の意義」『松東遺跡3次』浜松市教育委員会
- 鈴木 茂・進藤 武編 2021 『大岩山銅鐸の形成』野洲市歴史民俗博物館
- 高木宏和 2012 『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』美濃市文化財調査報告書34号
- 高橋美久二編 1987 『鏡と古墳—景初四年鏡と芝ヶ原古墳』京都府内巡回展示図録
- 田中 琢 1970 「『まつり』から『まつりごと』へ」『古代の日本5近畿』角川書店
- 中国科学院考古研究所洛陽発掘隊 1963 「洛陽西郊漢墓発掘報告」『考古学報』第2期
- 朝鮮総督府 1927 『楽浪郡時代の遺蹟』古蹟調査特別報告第4冊
- 辻田淳一郎 2019 『鏡の古代史』角川選書
- 寺沢 薫 2014 『弥生時代の年代と交流』吉川弘文館
- 中村大介 2024 『青銅器が変えた弥生社会—東北アジアの交易ネットワーク』吉川弘文館
- 難波洋三 2007 『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』科学研究費研究成果報告書
- 難波洋三 2011 「扁平鈕式以後の銅鐸」『大岩山銅鐸から見えてくるもの』滋賀県立安土城考古博物館

- 難波洋三 2012 「銅鐸を使う国々」『卑弥呼がいた時代』兵庫県立考古博物館
- 難波洋三 2021 「突線鈕1・2式銅鐸とその相互関係」『大岩山銅鐸の形成—近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の成立と終焉』野洲市歴史民俗博物館
- 難波洋三 2024 「銅鐸から見た弥生時代後期」大阪府立弥生文化博物館講演会資料
- 西嶋定生 1974 『中国の歴史2 秦漢帝国』講談社
- 西嶋定生 1999 『倭国の出現 東アジア世界のなかの日本』東京大学出版会
- 西村俊範編 1994 『古鏡コレクション開明堂英華』村上開明堂
- 白 雲翔 2020 「新莽貨泉的考古学論述」『華夏考古』第5期
- 橋本増吉 1997 『邪馬臺国論考1』平凡社東洋文庫
- 肥後弘幸 2016 『北近畿の弥生王墓 大風呂南墳墓』新泉社
- 平井泰男編 2000 『高塚遺跡・三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150
- 平尾和久編 2013 『三雲・井原遺跡Ⅷ—総集編』糸島市文化財調査報告書第10集
- 平尾良光 2004 「古墳時代資料の鉛同位体対比一覽」『古墳時代青銅器の鉛同位体比』研究成果報告書
- 馬淵久夫・平尾良光 1982 「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』第68巻第1号
- 馬淵久夫・平尾良光 1983 「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370号
- 馬淵久夫・江本義理・門倉丈夫・平尾良光・青木繁夫・三輪嘉六 1996 「神庭荒神谷遺跡出土青銅器の非破壊分析と鉛同位体比測定」『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会
- 水野敏典・山田隆文編 2005 『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 光石鳴巳編 2011 『脇本遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第109冊
- 南 武志・今津節生・北川路子・牧田碧夏・西川恵祐・永松剛・田中龍彦・卜部達也・木寺正憲・石塚香織・高久雄一・高橋和也 2013 「鉛同位体比測定に基づく遺跡から出土した朱（水銀朱）の産地の解析」『分析化学』62巻9号
- 森岡秀人 2015 「倭国成立過程における「原倭国」の形成—近江の果たした役割とヤマトへの収斂」纏向学研究センター研究紀要『纏向学研究』第3号
- 山尾幸久 1986 『新版・魏志倭人伝』講談社現代新書
- 李 峰・王 麟 1990 「青海省海晏県出土の新莽錢範」『中国錢幣』第3期
- 魯 禔玆・石川優生・平尾良光 2012 「岐阜県美濃観音寺山古墳出土鏡に関する自然科学的調査」『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』美濃市文化財調査報告書34号
- 사회과학원고고학연구소(社会科学院考古学研究所) 1983 『고고학자료집(考古学資料集) 제6집』백과사전출판사(百科辞典出版社)

謝辞

本論は2024年度JSPS科研費「漢六朝青銅器の総合的研究」(24K00149)の成果の一部である。

